
COBALT-SERIES
鬱金の暁闇4
うこんのぎょうあん
破妖の剣6
前田珠子
集英社

COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇 4

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇 4

前田珠子

集英社

目次

鬱金の暁闇 4

第十二章　白銀の破妖剣士……9
第十三章　孵　化……55
第十四章　飢餓の街……105
第十五章　覚　悟……149
あとがき……189

破妖の剣　鬱金の暁闇

これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。複数の命と強大な力を持つ魔性たちに人々は脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性がらみの事件の解決に尽力していた。

ラエスリールは、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は、破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女にはなにかと切れぬ絆や

因縁がつきまとうのだった。

翡翠（ひすい）の妖主の守護者の罠によって浮城を追放されたラエスリールは、数々の死闘を繰り広げ、この世に五人しかいないという妖主のうちの一人、翡翠の妖主を滅ぼす。ある濡れ衣によって父である金の妖主配下の魔性に命を狙われ、浮城で編成された紅蓮姫奪還チームに追われ、行き場のなくなったラエスリールは、闇主に連れられ逃亡していたが、潜伏先で弟・乱華にそっくりな半人半妖の少年・濫花（らんか）を拾ってしまう。その一方で第六の妖主（雛（ひな）の君）が誕生しようとしていて…。

紅蓮姫奪還チームのひとり、アーゼンターラが実は紅蓮姫の初代の使い手にして恋人だったラキスの生まれ変わりだと判明し、紅蓮姫はアーゼンターラに懐いてしまう。そんななか、父・金の妖主がラエスリールの前に突然現れ、彼女の喉元に無情にも手をかけて――。

妖主たち

金 **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

赤 **柘榴の妖主**
まだその正体はつまびらかにされていないが…。

緑 **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

第六の妖主（雛の君）
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

白 **白焔の妖主（白煉）**
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。



夫婦？

紫 **紫紺の妖主（藍絲）**
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。



娘



息子

ラエスリール（ラス）
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。



アーゼンタール（ターラ）
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

リメラトーン（トーン）
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

双子

オルグァン
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。



スラヴィエーラ
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

マイタード
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

懐いている



邪羅（ザハト）
妖主夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。

紅蓮姫奪還チーム

破妖の剣 人物相関図

親友

チェリク
浮城の元城長で、伝説的魅縛師だが妖主と結婚。

夫婦



マンスラム
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。

息子



乱華（リーダイル）
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。



濫花（リー）
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。

懐いている

アーヴィヌス
現在の城長。かつては捕縛師として活躍した。



闇主（千禍）
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。

護り手



セスラン
捕縛師。人あたりはいいが、実は食わせ者!?



彩糸
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。



サティン
面倒見のよい捕縛師。ラスの姉のような存在。

護り手



リーヴシェラン
琴の音を用いる魅縛師で、気の強い美少女。

しいかんじ?

浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

第十二章　白銀の破妖剣士

1

生温い風に乗って、錆びついた鉄の臭いが漂ってくる。
いや、違う。これはもっと生々しい臭い――気配だ。
ぎり、と唇を噛みしめ、訪れた四人は同時に身構えた――否、内ひとりは誰が動くより先に走り出したのだけれど。
それを引き金に、事態が動く。
「ターラ！」
「無茶だ！」
真珠を思わせる淡い光沢を放つ刃を振るう女性と、むき出しの肌いっぱいに刺青を施した青年が叫ぶ。
だが、呼ばれた少女は止まらない。
「ターラ！」

「もう少しぐらい待てって！」

ふたりの声が聞こえないわけでもあるまいに、走り続ける少女は瞬間首だけ振り返り、一言言い捨てた。

「待てない！　だって、奥にいる！」

そうして、また駆け出すのだ――奥に控える今回の禍の元凶に向かって。

迷いのない足取りで駆ける少女を引き留めるのは、ひとえに彼女が心配だからだ。この空間に満ち満ちた血臭の濃さを思えば、彼女の言うところである『奥』には、この事態を引き起こした元凶が待っているはずであり――それは生半な相手ではないと、経験上彼らにはわかってしまうからだ。

「ターラ！」

こうなってしまったら、もう少女を止めることはできない。

わかっていても、つい呼び止めずにおられなかった女性――スラヴィエーラは、しかし次の瞬間周囲に出現した複数の妖鬼に舌打ちした。

またか。

そう思う。

いつもいつもそうだ。

ターラ――アーゼンターラを中心にチームを組むようになってから、いつも最後はこうなってしまう。

ひとり飛び出していくアーゼンターラ。

追いかけ、彼女を助けようにもそれを阻むかのように出現する魔性たちがそれを許さない。

今回も、同じ。

「……ったく！」

声にはならない雑言を胸に、スラヴィエーラは仕方なく湧いて出たとしか思えない四体の妖鬼を前に、置き去りにされた格好のチームの面々に声をかけた。

「とっとと足止め雑魚片付けて、あの暴走機関車止めに行くよ！」

しかし、返ってきたのはあまり芳しいとは言えないそれ。

「足止め役ってのは同感だけど、こいつら雑魚じゃないって」

自らに彫られた刺青に気を込め、その内側に魔性の命を封じる異能の持ち主である青年の悲鳴混じりの声――。

「弱音吐いてるんじゃないっての！」

叫び返しながら、スラヴィエーラは手にある刃を間近に出現した妖鬼の心臓目がけて突きだした！

「いや、確かに雑魚とは言えないぞ」

周囲の空気を凍らせながら、次々に凍った魔性の命を狩る刃を振るう男がぽつりと洩らした。

男が手にしているのは斧の形状をしたものだ——しかし、それはただの斧にあらず。魔性を憎む想いで鍛えられた特別な刃——強すぎる存在である魔性の命を奪うことが可能な力を宿す、創造神ガンダルが与え給うた最高の奇跡。

魔性の命を糧とする、生ける刃。

破妖刀。

そう呼ばれるのは、最初にその力を持つと認められた武器が刀の形をしていたからだとも、魔を祓う刃はかつて等しく『刀』と呼ばれていたからだとも言われている。

男が手にしているものは、間違いなく魔性の命を絶ちそれを糧とするモノだ。

しかし——。

「弾力が凄い……素直に心臓を突き刺されてくれない……こいつら！」

破妖刀の刃を受け止めやがる！

淡い金髪の同僚が洩らした信じ難い言葉を、スラヴィエーラはすぐに我が身で実感することとなった。

突き出し、心臓を貫くと信じて疑わなかった自分の破妖刀――『夢晶結』の切っ先が妖鬼の皮膚に傷ひとつ負わせられないという事実が目の前で繰り広げられたことによって！

さながらゴムのように妖鬼の皮膚は伸びて夢晶結を受け止めている。その先にあるはずの心臓にその切っ先は届かない――それどころか、攻撃を受け止め切った妖鬼は、夢晶結の刀身を摑もうと腕を伸ばして来るではないか！

馬鹿な！

それを許してはならない――反射的に刃を退いた瞬間、一筋だけ妖鬼の皮膚に傷が走った。しかしすぐにそれは再生され、元の弾力のありすぎるものへとなる。

斬れない。

こんな馬鹿な話はない。魔性の命を屠ることができる唯一の武器である破妖刀の刃が傷つけられない存在など、妖鬼の水準では考えられない。

「あり得ない！」

叫びながら、再度正面の妖鬼の心臓狙って夢晶結を突き出す！

しかし、結果は同じだった。摑み奪われる前に慌てて剣を引くところまで最前と同じ繰り返しだ。

力の源である心臓――命が宿る場所という意味での話だが――を貫き、命の拠り所を潰さな

いことには魔性を斃すことはできない。破妖刀だけがそれを可能としてきたはずだというのに……その切っ先が阻まれるとは？

明らかに、これまでとなにかが違っている――いや、違って来ているのか？

考えろ、考えろ、考えろ――！

スラヴィエーラは必死に打開策を探す。

突き刺せない――だが、引けばすぐに消えるとは言え傷を負わせることはできる。それは先ほど自分で確かめたことだ。

ならば――。

「押しては駄目！　引くのよ！」

スラヴィエーラの消極的とも聞こえる言葉に、真っ先に反応したのは同じ破妖剣士ではない捕縛師マイダードだった。

「はあ!?　なに言ってんだ、スラヴィ！　ここで退いたら、飛び込んじまったあの爆弾娘の回収ができないじゃないか！」

爆弾娘とは、ここ一年の間にチーム全体に染みこんでしまったアーゼンターラを指す隠語である。

「だからぁっ！　退くんじゃなくて、引くって言ってるの！　よく言うでしょう、押しても駄

目なら引いてみなって！　押したら受け止められて下手したら破妖刀ごと向こうに持っていかれちゃうわ！　引き際に斬って斬って斬って……とにかく心臓に到達するまで斬り続けるしかないでしょう!?」

「なるほど」

得心がいった様子で答えたのは、淡い色彩を纏う屈強な体格の大柄な男――オルグァンだった。

「押しと引きの繰り返しか……確かにそれしかなさそうだが……」

ぽつんと落ちた一瞬の間が気になって要らぬ問いを放ったのは全身に刺青を施した捕縛師である青年だ。

「なに、旦那？　それで何か問題でも？」

本人にそんな自覚はなかったろうが――要らぬ突っ込みとはこのようなことを指すのだ――と、後にスラヴィエーラは述懐した。

なぜなら、マイダードのこの問いに対してオルグァンが返した答えというのが。

「いや、なに……なにやら鋸のようだと思って……な」

というものだったのだから！

さらにその答えを聞いた瞬間、未だ妖鬼に囲まれている状況にも拘わらず、マイダードが盛

大に噴き出してしまったことで、スラヴィエーラの頭のどこかの回線が何本か同時にぷつりと切れた。

「ふざけんな、この馬鹿男どもっ！　鋸だろうが斧だろうが剣だろうが包丁だろうがっ！　要は魔性の心臓さえ捌ければいいのよ！」

三人中、間違いなく一番豪快な性格を披露した女性が、有言実行とばかりに夢晶結の繊細な刀身を引いては斬り引いては斬りを繰り返し始める。

うっすらと走る傷に違うことなく刃を重ね、そうして少しずつ魔性の肉を捌いていく彼女の様子はどこか鬼気迫るものがあり……。

さすがに男たちも表情を改めた。

自分たちを置き去りにして駆け去った少女のためにも、ここは見栄えにこだわっている場合ではないと腹を括ったのだ。

どうせ……周囲に目撃者となる人間の生存者はいない。

そのやり切れないまでの哀しみと怒りをぶつけるにあたり、確かに見栄は必要ない。

何より、奥には——この騒ぎを引き起こした……街の住人の大部分を面白がって殺した最上位級の妖鬼がいるのだ。

飛び出していった少女にいかに強力な切り札があろうとも、なにしろ経験が少なすぎる——

助力は必要となるはずだ……今度こそ。

今度こそ。

胸中でつぶやき、自らの服の袖を引きちぎり、腕に彫られた特別な力を宿す刺青を露にしながら『刺青のマイダード』と呼ばれる捕縛師は破妖剣士の女性に声をかけた。

「スラヴィ！　その調子じゃ、夢晶結にご馳走してやる前にお前さんの体力が尽きちまうぜ。ここはひとつ共同戦線といかないか？　夢晶結へのご褒美は、帰城前に傷跡残さないって条件でご馳走してやるってことで」

マイダードが魔性の命を封じるのに用いるのは道具ではない。

かつて魔性によって一族全てを奪われた彫り師が、精魂こめて彼のほぼ全身に刻んだ刺青がその役目を果たすのだ。道具ではなく、刺青の文様に魔を封じる――それは本人にとって非常に危険なことだが、同時に普通の『封魔具』では考えられない活用法が許される。

もっとも……それに気づいたのは一年ほど前のことであり、内容は到底浮城の上層部に正直に報告できるようなものではなかったが。

そうして、遺憾ながらいつもその共犯関係に選ばれてしまう破妖剣士の女性は、盛大に舌打ちしつつも頷くしかないのだ。

「わかったわよ！　で、どうすればいいって!?」

「傷口に夢晶結突き立てろ！　心臓そのものは貫かなくても、近くの血が流されさえすりゃこっちのもんだ！」

マイダードに刺青を施した彫り師の家族は、棺に収める遺体と言えるかけらさえ残されていなかったのだという。

代わりに遺されていたのは大量の血と体液――それゆえにその彫り師に施された刺青には、封じるべき魔性の体液さえあれば、命をその本体から引きはがすだけの強制力が宿っているのだ。

「了解！」

スラヴィエーラが答えるのを聞きながら、マイダードは全身を支配する熱に浮かされるように叫びを上げた。

「さっさとこいつら片付けて、あの猪娘のあとを追うぞ！　それで今度こそ、らしくもない抱え込んでる秘密とやらを暴いてやる！」

ふたりの破妖剣士が賛同の声を上げたのはその直後のことだった。

※

「なんだ、捕縛師か」

心底がっかりしたように、今回の惨劇の元凶は言い捨てた。

それは、一見したところ人間の子供にしか見えない姿を纏っていた。

魔性は人間に近い容姿をしているものほど強大な力を誇る。人間のほとんどが何の力も持たず、魔性に対して無力であるというのに、この特徴は皮肉としか思えない。

きり、と唇を噛みしめながら、アーゼンターラは元凶たる存在を睨みつけた。

本当に……人間の男の子にしか見えない。ただひとつの特徴を除いては。

それは子供の眉間——胡桃ほどの大きさの穴がぱっくりと開いているそこに、あり得ないことに水がたたえられていることだ。

ぽたり、ぽたりと額から水が零れる。それが床に落ちた瞬間、ジュッと音を立てて穴を穿つのをアーゼンターラは見た。

強力な酸。

それがこの街を、住民の大部分を骨すら遺さず溶かし尽くしたのだ。

この小さく無力な子供にしか見えない魔性が。

「どうせなら、一緒に来ていた破妖剣士のほうが楽しかったかな……せっかく待っていたのに、真っ先にここに辿り着いたのが雑魚だなんてがっかりだ」

七、八歳にしか見えない妖鬼が、心底落胆したように呟いた。
その声には、姿からは想像もつかないほどの疲労と絶望の響きが宿っており、アーゼンターラは怒りではない別の何かに胸を締めつけられる錯覚を覚えた。
馬鹿な、とすぐにその感傷めいた思いは振り払ったのだけれど。
自分の目の前にいるのは、街の住人全てを自ら生み出す酸で溶かし、殺した凶悪な魔性なのだ。絶望など、どうして覚えるはずがあろう？
だから、子供の姿をした魔性の声に宿っているように感じた響きはあくまで気のせいにすぎないはずだ。
奮い立て——奮い立たせろ——闘志と決意を思い出せ。
自身にそう言い聞かせながら、アーゼンターラは左の腰に差した剣の柄にそっと触れた。伝わってくるものはない……何も。
二対の翼を摸した独特な形の鍔を持つ刃は、この段になっても何の反応も見せようとしない……お仕着せの鞘に収まったままぴくりとも動かない。
いつもと同じ、だ。
どうして——思っても、それは詮無いことだ。この一年ほどで、イヤというほど思い知らされた。

だが、それでもなお、今度こそと期待するのは自分の身勝手さだろうか。それともまだ自分に足りないものがあるから、彼女は反応しないのか。

答えはまだ出ていない。まだ、と思うことこそが逃避だと指摘されても、アーゼンターラが諦めない限り、そう思うことは許されるはずだ。

そう……たとえ、稀代の破妖刀を腰に携えたこの状況にあってすら、相対する妖鬼に破妖剣士ではなく捕縛師と認識されるほど、『彼女』が何の反応を示さないとしても。

またか……まだ。

彼女は自分には力を委ねてくれないのか——。

一瞬、固く目を瞑る。

それは大きすぎる落胆だったが、絶望と呼べるほどに深く巨大なものではなかった。

なにより、そんなものに捕らわれている余裕など自分にないことをアーゼンターラは誰よりよく知っていた。

だから、ふ、と息を洩らしたあと、真っ直ぐに対峙する魔性の子供を見つめて問いかけた。

「……なぜ、こんなことを？」

どんな理由があって。

何の目的があって。

こんな悲惨な事態をお前は呼び寄せたのか――？
子供はくすくすと笑いながら「なぜ、そんなことを聞くのかな？」と問い返してきた。
「知りたいから」
と、率直に答えると……子供はなぜか複雑そうに笑った。
そうして紡がれた答えは――。
「別に。賭けをしてみただけだ。額のこの穴を塞いで、目くらましで人間の目には見えないようにして……無邪気な子供のふりをして、さ。いつまで馬鹿な人間たちが騙されてくれるのかを調べてみたくなっただけだよ」
目くらましが解けないままなら、街も住人たちも無事。
気づかれたらそれで賭けはお終い。
「ま、お終いになっちゃったけどね」
だから、全部溶かしちゃったよ。
けらけらと笑う子供の声が、なにやら引っかかった。
身勝手な賭けの代価に街と住人全ての命を奪うような冷酷な存在であるはずの妖鬼が、どうして傷ついたように気配を揺らすのか。
ふと、アーゼンターラは思った。

お終いになってしまった賭け――では、当のこの妖鬼はどちらに賭けていたのだろうか……？

終わりの時を待ち望んでいたのか、それとも終わりを遠ざけたかったのか――。

魔性の態度から、その答えは見えたような気がしたが、今さらそれで何が変わるというわけでもないこともまたわかっていた。

どんな理由があろうとも、無残に体を生きながらに溶かされた街の住人たちのことを思えば、人間として目の前の相手を許すことなどできるはずがない。

「――ターラ」

待ち望んだ声が降って来たのはその時だった。

それまで余裕を失うことのなかった妖鬼が、声と同時に現れた少女の姿に目を瞠った。

幼い体の膝までも届く漆黒の髪は艶やかで、子供ながらその顔立ちの秀麗さは筆舌に尽くしがたいもの。人間にはあり得ぬ美をたたえたその子供――少女の瞳は混じりけのない漆黒。

そう、漆黒の色彩を纏うことを許された、世界に五十ほどしか存在しないはずの高位魔性――妖貴だった。

「馬鹿な！」

震える声で妖鬼が叫んだ。

「なぜ、漆黒の方々のおひとりが……？」
しかし、子供の驚愕の声など素知らぬ顔で漆黒の魔性はアーゼンターラにのみ話しかける。
「結界は敷き終えたわ。もう誰もこの中に入ることも、ここで起きることを視ることもできないわ」
いつでもいいわ――。
続けられた言葉に、アーゼンターラは一瞬皮肉げな笑みを浮かべ――そうして、整えられた舞台のための『主役』を呼び出すために菫色の瞳を閉じた。
自分では反応ひとつ引き出すことのできぬもう一人の『主役』を目覚めさせるただひとりの人物を。
そうして――呼び出されたのは。
少女でしかない肉体に浮かび上がる少女ではあり得ない光輝。
銀の髪に菫の瞳――変わらず少女の肉体であるにも拘わらず、現れた存在は全く違うモノだった。
「お目覚め、わたしの暁の姫」
愛しげに呼びかけながら、その指が腰に携えられた剣の柄に触れると同時に――。
ほんの先ほどまで二対の翼を摸した装飾にしか見えなかった剣の柄飾りが、ざわりと確かに

震え、動いた。

「行くよ、紅蓮姫」

少女の喉から紡がれた、低すぎる声に歓喜の声を上げながら——剣はその真紅の刀身を露にした。

2

ガンダルース大陸の中心に位置する広大な砂漠――白砂原。
その中心の上空に、創造神ガンダルの篤き加護を示すかのように浮遊する巨大城砦浮城は存在する。
大地の引力から解放された奇跡の場所には、奇跡を具現した人間たちが集う――その強大なる力を以て人間を脅かす魔性に対抗し得る力を持つ者たちが。
浮城と呼ばれるそこは、世界に唯一の退魔の能力を持つ者たちが集う組織の本拠地である。
魔性の命を封じる捕縛師、魔性の命を狩る破妖剣士、魔性すら魅了し人間の味方にする魅縛師――数百人を越えるその住人たちを統括するのは城長……現在その任に就いているのはアーヴィヌス。
かつて捕縛師として数多くの魔性の命を封じてきた男だ。
「ご苦労だった」

城長の執務室で、男は無事に任務を遂行し帰還を果たした四人の若い男女に労いの声をかけた。

「今回ガエリスの魔性を早い時期に退けることができたことは何よりのことだった。名は明かせないが依頼主からも感謝と賞賛の手紙が届いている。本当によくやってくれた」

ガエリスは浮城の有力な後援国のひとつであるクルクリエの副都にほど近い街だった。

魔性の脅威に晒され、クルクリエがどれほど強硬に浮城へ圧力をかけたかは想像に難くない。そのための援助だ。

「……恐れ入ります」

少しの間を置いて答えたのは、派遣された四人の中でリーダー的役目を果たしている女性の破妖剣士スラヴィエーラだった。

ガエリスの惨状を思えば、到底うなずける言葉ではなかったが、依頼主であるクルクリエ王国中枢としてみれば、たとえ街が全滅しようと被害がそれ以上広まることがなかったというだけで充分なのだろう。

確かに魔性とは天災のようなものだ。

どんな気まぐれで何を、何処を狙ってどんな行動を起こすか一切想定できない。

そして、いざ動き始めた魔性に対して人間は常に後手に回らざるを得ないのだ。彼らの行動

を予測する術は浮城ですらも持たないのだから。
だが、騒ぎの元凶を仕留めたところで失われた命は戻ってこない。生きながら酸に溶かされ痛みと恐怖のなかで命を落とした者たちは一人として還ってはこないのだ。
それはこの世界の理だ。
死者は還ってこない。時は巻き戻せない。
ごく平穏な日々を送っている人間でもわかっている真実だ。
しかし、あの地獄絵図を脳裏に焼きつけられた人間にとって、依頼主の賞賛を素直に喜んでいるとしか思えない城長の態度は――いささか神経に障る。
アーヴィヌスとて、若かりし頃は実戦で命をかけて魔性の脅威と戦ってきたはずだ。現場の悲惨さ、凄惨な光景を知らないはずはない。
なのに、ガエリスの住人が彼ら四人が到着した時点ですでに全滅していたことについて一言もないとはどういうことだろう。
実戦退いたらそういう記憶って薄れちゃうのかしら……？　それとも、あんまり事態が目まぐるしく動きすぎて心の一部が麻痺しちゃった、とか……？
どちらもあり得そうなことだとスラヴィエーラは思った。
数年前からその兆しはあったが、ここ一年ほどに起こった魔性被害は浮城史上でも類を見な

いほどの多発ぶりなのだ。

しかも被害規模が大きい。以前は単独で依頼に赴くことも珍しくなかったが、現在ではまずそれは叶わない。必ずといっていいほど、三人から四人のチームを組まされる。

まあ……あたしらの場合、相性というより口封じを兼ねての組み合わせなんでしょうけどね——思い出すのも忌々しい浮城の選択が為されたのは一年前のことだ。以来スラヴィエーラたちは他の面子と組まされることがなくなった。理由など、考えるまでもない。

虫酸が走るが、それを非難ばかりもできない。おかげで浮城は紅蓮姫を有効に活用できるようになったわけだから……そのおかげで救われた命も少なくはないのだ。

やめよう——そっと息を洩らしながら、スラヴィエーラはちらりと同僚の少女に目をやった。

かつて自らを男子だと信じて振る舞っていた銀髪の少女は、二対の翼をあしらったデザインの剣を両手で握りしめていた。

浮城最強の破妖刀——紅蓮姫。

アーゼンターラがその使い手に選ばれた一年前に比べれば、扱いはずいぶん上手になったと思う……少なくとも鞘から勝手に抜けて魔性目がけて使い手を振り回すという事態は一度きりで済んでいるのだから。

だが、それがいつまで続くかはわからないままだ。だからこそ、スラヴィエーラは延々と続く城長の言葉を遮るようにアーゼンターラに声をかけた。

「ターラ。紅蓮姫は……その、大丈夫？　鍔鳴りの兆しとか……」

その言葉に、ぎょっとした顔になったのはアーヴィヌスだ。

「ガエリスの魔性の命を啜ったはずだろう!?　もう飢えたとでも言うのか!?」

アーゼンターラは静かにかぶりをふった。

次いでその唇から洩れた言葉はといえば。

「いえ……どうにも味が気に入らなかったらしく……蜜里が言うには口直しが欲しいと思っているそうで……」

その場にいた少女以外の全員がひくりと口元を引きつらせた。

今回の騒動の元凶は、異形の印をひとつしか持たない、かなり見目の良い妖鬼だったはずである。魔性は人間に近い姿を持つ者ほど強いとされる。しかもその力は容姿の美しさに現れるのだ。

そういう意味で言えば、今回紅蓮姫が葬った魔性は最上級の妖鬼であったはずだ。

それを――味が気に入らない？

では、口直しにどんなご馳走を望んでいるというのか……。あまり考えたくはない。その思

いはやはりアーゼンターラを除く全員に共通したものだったらしく、アーヴィヌスが早々に話を切り上げた。

「ご苦労だった。本当によくやってくれた。皆、充分に休んでくれ」

そう言ったあと、気遣うようにアーゼンターラに声をかける。

「紅蓮姫を保管室に戻さなければならないが……気が進まないようであれば、わたしが預かっておこうか？　……あまり気持ちの良いことではないだろうからな」

本人には悪意はなく、純粋に親切のつもりで口にした言葉だったのだろう——とはスラヴィエーラにもわかった。

しかし——。

ぴく、とアーゼンターラの肩が震えるのを見て、彼女は内心「あーあ」と天を仰いだ。

最悪なことを最悪なタイミングでよくも言ってくれたものだ。

アーゼンターラにとって、それは神聖な儀式にも等しいというのに——よりにもよって、「気持ち悪いだろう」はなかろうに……。

だがスラヴィエーラの心配をよそに、ここ一年ほどで『白銀の破妖剣士』の異名で知られるようになった少女は、低く押し殺した声で「いえ」とだけ返し、深々と頭を下げて退室の挨拶に代えた。

もっとも、彼女が城長の言葉に何も感じなかったのかといえば、そんなはずがあろうわけがなく――。

きっちりと執務室の扉を閉めた瞬間、「……××親父」と呟く声が聞こえた。

それはそれは迫力満点の声だった。マイダードがお気楽な声で「せっかくの別嬪なのにガラ悪くなっちゃってまあ……」と嘆いたが、アーゼンターラはふん、と行儀悪く鼻を鳴らすと乱暴な足取りで廊下を歩き出した。

少女の背中を見送りながら、スラヴィエーラはしみじみと呟いた。

「……強くなってくれたのはいいんだけどね……」

一年前までの、きりきりと張り詰めた気配は今のアーゼンターラにはない。

それは嬉しい――純粋に嬉しいが。

「強くなりすぎてお嫁の貰い手がなくなるんじゃないか……ちょっとお姉さん、心配かも」

背後でふたりの同僚がぐぐもった声を上げたが、もちろん彼女は無視した。

※

紅蓮姫を両手で抱きしめながら、アーゼンターラは浮城の奥まった一室を目指す。

次の仕事まで、紅蓮姫を保管するために用意された部屋だ。

一年前、浮城に戻った紅蓮姫には普通に言うところの『鞘』がなかった。抜き身の紅蓮姫などという恐ろしいものを、当然普通に置いておけるはずがなく——何しろ食欲を満たすためなら、浮城の護り手だろうがお構いなしに襲いかかる暴走破妖刀だ——急遽それまで空き部屋だったそこを改装して作られたのだ。

前述した通り、紅蓮姫の危険性は浮城でも有名であり、決められた者以外は出入りできないよう強力な結界が複数の護り手によって敷かれた。

しばらくして、紅蓮姫のための新たな鞘は出来上がったのだが、アーゼンターラは仕事から帰還したら必ずこの保管室に紅蓮姫を持ってくることにしていた。

理由のひとつに、新しい鞘はどうにも完璧ではなく、気を抜けば紅蓮姫を容易く解放してしまうからというものがあるが、それが全てではない。

いや、真の理由は別にあるというべきか——。

脳裏に甦るのはあざやかな朱金の炎……自分など到底及ばない圧倒的な輝きに満ちた力。

「紅蓮姫……」

腕の中にある破妖刀に囁きかける。

「お前がこの鞘に満足しないのは……多分そういうことなんでしょうね」

それは少しだけ胸が痛む考えだったが、仕方のないことだとも思ってしまう。
けれど今、あの輝くひとはいないから――。
もう少しだけ、わたしに力を貸してちょうだい、と声なく彼女は破妖刀に願う。
保管室へと続く結界壁に触れたのはその時だった。
『何者だ』
誰何する声は空中から聞こえてくる――保管室の警備を任された護り手のひとりだ。
姿は見えない。当然のことだ。アーゼンターラの胸に抱かれているのは浮城の護り手たちすら餌扱いしかねない恐怖の食欲魔神なのだ。うっかり姿をさらしでもして、さっくり戴かれてしまってはたまらないということだろう。
「白銀の鍵よ」
それはこの先に出入りするために定めた『呼び名』だ――ただアーゼンターラと名乗っても、これから先に進むことはできない。
『白銀の鍵は何のために先に進む？』
「紅き焔を櫃におさめるため」
『櫃のなかにはなにがある？』
「仮初めではない全き鞘」

決められた言い回しの言葉をいくつか応酬したところで許可が下りた。

『進め』

こくりとうなずき、アーゼンターラは再度歩き出した。

問題の部屋に辿り着くまで、こんなやりとりを合計三度繰り返さなければならない。それぞれで決められた言い回しがあり、それを守らなければたとえアーゼンターラ自身であっても先に進むことはできないのだ。

一度故意に違う言葉を返したところ、護り手達は断固として通ることを許してくれず、ずいぶんと難儀したものだ……というのも、その時彼女は紅蓮姫を保管室に戻しに行くところだったため通行を拒否された結果、不完全な鞘におさまった破妖刀を一晩中抱え込んだまま部屋に閉じ籠もる羽目に陥ったのだ。

後で聞いたところ、護り手たちの敷いた結界は合い言葉の応酬に誤りが生じた場合即座に丸一日接触不可能な状態になるのだという。たとえその直後に正しい応酬を繰り返したとしても、丸一日は開かずの結界のままなのだ。

好奇心猫を殺すとはよく言ったものだ、とその夜アーゼンターラはしみじみ思ったものだ。紅蓮姫を抱え込んでほぼ丸一日、部屋に閉じ籠もっている間、彼女は誰かが訪ねてくるのではないかと気が気ではなかった。浮城の住人にはまず間違いなく護り手がついており、そうして

彼らは滅多なことで護る相手から離れたりはしないからだ。

扉がノックされると同時に勝手に鞘から飛び出して、扉の向こうにいる『ご馳走』目がけて襲いかかるのではないだろうか――実際に体験したことのあるだけに、アーゼンターラは恐怖に満ち満ちた一日を過ごすこととなった。実際は結界担当の護り手たちから紅蓮姫が保管室に入っていないことが住人に通達されたおかげで、そんな恐ろしい事態とはならなかったのだが……二度と下手な好奇心は起こすまい、と固く心に誓ったものだ。

最後の関門は、件の部屋の扉の前。

『名前は？』

問いかけてくる声に、短く答える。

「アーゼンターラ」

『通れ』

そうして扉の鍵が開く。

すう、と深く息を吸いこんでから、アーゼンターラは取っ手に手をかける。

きぃ、と微かに軋む音をたてて扉が開くと、室内からはひんやりとした冷気が洩れ出てくる――吐いた息が白い。

室内は、氷室になっているのだ。

かつり、かつりと靴音を響かせて、アーゼンターラは部屋の中心へと近づく。
そこには大きな櫃がひとつ置いてある。室内に、他にはなにもない。
しかしその櫃こそが……いや、正確に言うなら、その櫃の中身こそが問題なのだ。限られた人間しか出入りができないよう、厳重に護られたそこには、決して口外が許されぬ『秘密』が横たわっている。
かつり、かつり——さらに近づくと彼女は蓋が開いた状態の櫃のすぐそばで膝をついた。
そうして櫃の中に眠る——眠っているようにしか見えないひとに声をかける。
「ただいま戻りました……」
ラエスリール——と。
呼びかけるがその瞼はぴくりとも動かない。
艶やかな黒髪も染みひとつない肌もきりりとした口元も——何もかもが一年前から変わらないまま、紅蓮姫の真の鞘にして使い手……浮城を追われた罪人であるはずのその女性は、極秘裏にここで眠り続けている。
仮死という名の長い眠りから覚めることがあるのか否かさえ謎のままに——。
そして、その姿を目にする度に、アーゼンターラは繰り返し思い出さずにはいられないのだ……一年前の、あのガンディアでの出来事を。

3

「トーン！」
声は、聞こえた。
聞こえていた。
「トーン、しっかりおし！」
その声に聞き覚えもあった。
けれどそれが自分を呼ぶ声だと認識できなかったのは、呼ばれた名が『トーン』であったためだ。
トーン――リメラトーン。自分のたったひとりの弟。
けれど彼は自分のそばにはいないのだ。三年前、村を灼かれたあの夜に、漆黒の魔性によって攫われてしまった。
両親や村の皆が躍起になって決めようとしていた婚約から逃れるために、こっそりと嫌がる

弟を引きずるようにともに家を抜け出したあの夜――。

村を覆う紅蓮の炎に気づいてふたり駆け戻ろうとして――その途中でふたりの漆黒を纏う魔性たちに捕らわれそうになった。

その時自分は足を挫いて――必死に弟に叫んだのだ。

逃げて、と。村に戻って皆を助けて、と。

身動きの取れない自分は弟の足手まといにしかならないと感じたから、迷わず叫んだ。彼だけでも無事でいて欲しいと思った心に嘘はなかった。

けれど、結果は皮肉としか言いようのないものだった。

挫いた足で満足に立ち上がることもできなかった自分は、妖貴の女に捕らわれる寸前、奇跡のような偶然で真紅の刀身の破妖刀を操る女性に救われ……一方逃がしたつもりの弟は村を包む炎に呑み込まれ、その半身に重大な火傷を負ったところを追っ手である魔性によって救われた。

その現実を――事実を事実と認めることができずに記憶を歪めたのは自分の弱さだ。

足を痛めて助かるはずがないと思った自分が助かり、助けようと思った弟の姿も気配も完全に消えてしまったという状況に、当時の自分は耐えられなかった。

馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な！

そんなことがあるはずがない――あっていいはずがない！

繰り返し繰り返し現実を否定した。そうして果てに辿り着いたのは、自分でも吐き気を催すほどに醜悪な事実のすり替え……。

捕まったのは自分ではなく自分を逃がしてくれた姉なのだと、自分は村を目指す途中で幸運にも通りかかった破妖剣士に救われた弟――リメラトーンなのだと、記憶を塗り替えた。弟の喪失をどうにも受け入れられなかったということも確かにあるが、それ以上に助かったのが自分であることが堪らなかったのだ。

そうして、自身がリメラトーンだと思い込んで――魔性に捕まえられているはずの姉を救うために懸命に努力を重ねた。それは身勝手極まる逃避だった。

魔性に捕らえられた家族などいない。少なくとも自分を助けてくれた破妖剣士の連れらしい男が「なかなかの火力だな。骨ひとつ残っちゃいない」と気遣いも何もない口調で告げた時、自分は確かに弟の死を確信したのだ！

だから、記憶のすり替えは完全な逃避であり自らを護るための言い訳を求めた結果でしかなかった。

そんな狡さを暴いたのは、生きていてくれたリメラトーン本人だったのだけれど。

『ターラのせいだよ』

『ターラは狡い』
『ターラは償うべきだよ』
半身に火傷の痕を残した弟は、残酷なまでの率直さでアーゼンターラの罪と弱さを責め立てた。
弱さゆえに現実から逃れようとした彼女を、しかしその苛烈な言葉が引き戻したのだ。
自分がアーゼンターラであるという事実、自分のせいで村が灼かれたという事実、自分のせいで弟が大火傷を負い、あまつさえ強大な魔性に捕らえられたという事実。
突きつけられたそれらに一時恐慌状態に陥ったものの、取りあえず平静に戻れたのは何より必要とした力を手に入れたからだ。
そう……村を灼き尽くした魔性を退け、捕らわれたリメラトーンを救い出すために絶対に必要な強大な力を！
最強の破妖刀――紅蓮姫がなぜか自分を選んでくれたから、自分は自分を取り戻し、尚且つ前に進むことを選び直すことができたのだ。
だのに、そのはずだというのに……紅蓮姫はどうして――。
「トーン！」
また、聞こえるあの声。

「トーン、しっかりおしったら！」
やめて、やめて、やめて――！
「あたしはトーンじゃない！」
思わず叫んだ心の声は、しかし現実に自分の喉から発されたものだった。
鼓膜を打つそれに、一気に意識が浮上する。そうして目にした、明らかにほっと安堵する様子の女性が誰であるのか、アーゼンターラはそこでようやく気がついた。
「スラヴィ……？」
呆然として呼びかけると、剛毅な性格で以て知られる女性は一瞬顔をくしゃりと歪め、次の瞬間彼女の体をぎゅうぎゅうに抱きしめた。
……優雅な外見をしているとはいえ、魔性の命を糧とする破妖刀夢晶結の使い手の腕力は生半なものではなく、アーゼンターラは一瞬絞め殺されるかと思ったのだがこれは内緒だ。
第一、心底安堵した顔で「よかった、よかった」と繰り返されれば、相手に悪意がないことは明白であり、それどころか相当な心配をかけてしまっただろうことが見て取れるのだからどうこう文句を言えるはずもなかった。
だが、そうやって現実に意識を向けてみれば、違和感ばかりが襲いかかって来る。
見慣れてはいないが見覚えがなくもない趣味の良い豪華な室内の様子に、ここが浮城ではな

く『紅蓮姫奪還』のために派遣されたガンディアの王宮の、自分たちに宛がわれた一画であることを理解する。

さらに言うなら、ここは自分が半月以上暮らしてきたはずの部屋で――なのに、なぜだろう……決定的な……何かが。すでに違和感などという言葉では言い表せない何かを感じるのは。

「大丈夫だよ」

そんな自分の焦りにも似たもどかしさを感じ取ったかのようにスラヴィエーラが宥めるように囁いてくる。

なにがどう大丈夫だというのか……そもそも彼女は何を指して自分が「大丈夫じゃない」と感じていると言うのだろう――。

三年間というもの、ほとんどの記憶を凍結させすり替えてきたアーゼンターラにとって、現実に戻って間もない今は、戻ってきたそれと新たに加わるそれとの整理すらままならない状況だ。八つ当たりだとわかりつつも、何がどう大丈夫なのか説明して欲しいと思ってしまった。

そうしたら――だ。

まるでそんな彼女の心の声を拾い上げたかのように――そうとしか思えないタイミングで、スラヴィエーラが安心させるように告げたのだ。

「大丈夫だよ、あの子供は死んじゃいない」

その刹那、捻りこむようにしてしまい込まれていた記憶が一斉に解放された。

庭で出逢った子供の気配に突然暴れ出した紅蓮姫を、自分は抑えることができなかった。破妖刀である紅蓮姫が反応する理由はひとつしか思いつかず、しかし無邪気に笑って健気に素振りを繰り返していた子供――リーが魔性だとはとても信じられず……。

来るな、逃げろと必死に叫んだにも拘わらず、子供は扉の外から離れてくれなかった――貪欲な破妖刀に操られるままに扉ごしにその体を貫いた感触を、はっきりと思い出した。

紙のように容易く扉を切り裂いたその先に、左肩から血を流して床に座り込んでいる子供が見えた。信じられない、どうして――と、その瞳が問いかけてくるのに、自分は紅蓮姫をやはり抑えることはできなくて。

このままではリーを殺してしまう。

そう思った次の瞬間、目に飛び込んできたつややかな黒髪――。

子供を庇い、紅蓮姫の前に無防備に背中をさらしたそのひとが一瞬見せた顔……瞳。左右色違いの闇と炎を思わせる左の深紅と右の琥珀。

それは三年前に、自分を妖貴から救ってくれた破妖剣士のものだった。

このひとが――なぜ、ここに？

疑問に思うより先に大きすぎる衝撃に打たれた。

なぜなら、命の恩人であるはずのそのひとの背に、紅蓮姫の刀身が深々と突き刺さっているのを目にしたからだ。

リーばかりか、自分は彼女までも殺すのか？　命の恩人を、誰よりも気高い破妖剣士だと感じて憧れたそのひとを？

声にならない悲鳴を上げて、それからの記憶が途切れている。

さぁっと全身から血の気が引くのを感じながら、アーゼンターラはスラヴィエーラにしがみついた。

「リーは!?　それからあのひとは!?」

噛みつくように尋ねると、年上の女性はどこかほっとしたような顔で答えた。

「大丈夫、ふたりとも生きているから」

それは微妙な言葉だった――無事ではないということだ。

つまり、リーを傷つけ、あのひとの背中に紅蓮姫を突き立てた記憶は間違いなく現実に起こったことを意味する。

「だって！　リーはあんなに血を流してて……あのひとだって、あんなに深く紅蓮姫が……紅蓮姫が――っっ！」

あんなに深く刺し貫かれて無事にすむとは思えない！

「だから大丈夫だって！　あんたもミランスさまの話を聞いただろう!?　彼女自身が紅蓮姫の鞘になってるって！　鞘が紅蓮姫に傷つけられるわけがない！　実際、血の一滴も流れやしなかった……安心していい。あんたは誰も殺してない」

震えるアーゼンターラの体を抱きしめ、安心させるようにスラヴィエーラの指が背中を撫でる。

少しずつ震えが治まるにつれ、アーゼンターラはゆるゆると現実が頭に染みこんでくるのを感じた。

「……あのひと、だった。彼女が……二年前、あたしを助けてくれた……」

「ああ」

抱きしめる腕の力はそのままに、スラヴィエーラが頷くのがわかった。

「炎そのものみたいに綺麗で強くて……破妖剣士の中の破妖剣士だって思った。あのひとみたいになれたら……自分がもっと強くなれたら、あの日失ったものも取り戻せるかもしれないって……だから、破妖刀に選ばれたくせに魔性の側に堕ちたひとなんて絶対に認められないと……許せなくて」

「……わかるよ」

「なのに――」

彼女が――紅蓮姫の使い手だったなんて！

信じられない。信じたくない。存在そのものが破妖剣士でしかないと感じたあのひとが、どうして浮城から追われるような罪を犯したのか。

いや、そうではない。

そもそも彼女は本当に罪を犯したのか？　犯したというのなら、それはいったいどんな罪だというのか。

「……浮城は、もしかしてただ紅蓮姫を取り戻したかっただけなの……？　そのために、彼女に濡れ衣を着せて……追って……？」

常々感じていた浮城への不信と三年前の事実――これまで信じていたことが覆され、アーゼンターラのなかで天秤が傾きを変える。

それをぴしゃりと遮ったのはスラヴィエーラだ。

「逸らないで、トーン……いや、思い出したのならもうアーゼンターラと呼んだほうがいいかしら。彼女が潔白だという証拠もないのは確かなことよ。あなたが浮城に入る前のことだから、きっと知らないでしょうけど、彼女と瓜二つの魔性が街を滅ぼしたという報告が届いたことがあったの。そうして調査に向かった者は、それが『もうひとりの彼女』なのだと結論を出した……彼女に宿る半分の魔性が、彼女の知らぬ間に顕現した姿なのだと」

半人半妖である彼女は、確かに限りなく黒に近い存在ではあるのよ――。

厳しさを孕んだその声に、アーゼンターラはこくりと喉を鳴らす。

「それに今回の騒ぎだって、彼女が半人半妖の子供なんて連れてるから起こったことなんだし……どういうつもりなんだか知らないけど、周囲の迷惑を少しは考えて欲しいものよね」

詰るような言葉だというのに、なぜかその声には呆れたような響きがあった。

「スラヴィ……」

「だからね」

完全に震えの止まったアーゼンターラから腕を解き、スラヴィエーラが顔を覗きこんできて笑った。

底意地の悪さを窺わせるあまりタチのよろしくないその笑みに、一瞬身を引きかけたのは秘密だ。

「良い機会だから、みんなで彼女を締め上げてやろうと考えてるの。無口だろうが口べただろうが知ったことじゃないわ。全部吐かせてしまいましょう？　彼女のことをどう捉えるか、考えるのはそれからでいいとは思わない？」

聞きようによっては物騒な発言内容に、しかしアーゼンターラは笑いがこみ上げるのを感じた。

確かにそれがいい——それしかないと思ったのだ。
浮城への不信も、裏切り者への怒りも、恩人への感謝と憧れも——今のままではどうにも折り合いがつけられないのは確かな事実であったから。
だから、少し落ち着いたら彼女の部屋を訪ねようとスラヴィエーラからの提案に首肯して、アーゼンターラはその時を待った。
ラエスリールの話を聞くことは——結局叶わなかったのだけれど。
彼女は部屋で冷たくなっていた……その身に紅蓮姫を宿したままで。

※

「……あれから大変だったんですよ」
櫃の中に眠る狡いひとを見つめながら、アーゼンターラは語りかける。
「あなたは死んだとしか思えない状態なのに、あの白い青年は『死んでない』と言い張るし、ミランスさままで賛同なさるし……」
完全な膠着状態とは、あれを指すのだ。
「そうこうしている内に浮城からはあなたを連れて来いと命令は下るし」

実際は『鞘ごと紅蓮姫を持ち帰れ』というのが命令内容だったが。

「帰還したら、もうすっかりこの部屋が用意されていて、なぜか蜜里があなたから紅蓮姫を取り出して――」

アーゼンターラとしての記憶を取り戻した彼女に、護り手である蜜里は心底嬉しそうに笑ったあと、緊張した面持ちで「ターラに紅蓮姫をあげる」と言って、実際にラエスリールの体を傷つけることなく真紅の刀身の破妖刀を顕現させたのだ。

妖貴である蜜里の気配に、現れた紅蓮姫は盛大に暴れようとしたのだが、すかさず用意してあった新たな鞘に収めることでその場は何事もなくすんだ。

「もっとも、二度とご免だとは言ってましたけど。あれは、もしかしたら自分を餌に引っ張り出したのかしら……」

だったら、あたしも二度とは許すつもりはないけれど――。

決して答えを返してくれないひとに、それでもアーゼンターラは語りかけずにはいられないのだ。

「そうして……あたしが紅蓮姫の新しい使い手だと浮城は認めたけれど……でも」

そうではないことを、あたしは知ってます。

「だって、紅蓮姫はあなたの傍らでなければ完全には鎮まらない。彼女の声だって、あたしに

は聴き取れない……」

スラヴィエーラはそれが普通なのだと言っていたけれど、ラエスリールと紅蓮姫の間にあった深い繋がりを聞いてしまったら、とてもそうは思えない。

自分は紅蓮姫を一時期借り受けて使わせてもらっているに過ぎないのだ。

それでも……。

「あなたの魂がどこを彷徨っているかもしれないのに……少しだけそのことを喜んでいるあたしをどうか許してください」

櫃の縁に額をおしつけて、彼女は囁く。

「もう少し……もう少しだけ、紅蓮姫をあたしに貸しておいて。頑張って、もっと力をつけるから……妖貴にだって負けないように、きっとなるから――」

そうして、今度こそ間違えることなく、自分の意志で弟を――リメラトーンを取り戻す。

そのためには紅蓮姫の力は不可欠なのだ。

たとえ借り物でも。本当の自分の力ではないのだとしても。

「お願い……」

絞り出すような声でそう告げると、アーゼンターラはゆっくりと立ち上がり、横たわるラエスリールの横に抜き身の紅蓮姫をそっと置いた。

「近いうちに、また来ることになると思います。それまで紅蓮姫をよろしくお願いします」
そう言い、一度深々と頭(こうべ)を垂れたあと、彼女は踵(きびす)を返した。
前を見据える菫(すみれ)色の双眸(そうぼう)に、もはや迷いの色はなかった。

第十三章　孵化

1

時が、満ちる。
最後に到る力のかけらが届けられる。
それは最初から約束されていたもの——同時に五つ目に届けられることが決められていたものだ。
世界に生まれ落ちて以来ずっと眠りの繭に包まれていた存在はそのかけらを手にすることでようやく繭を破ることが許される。
眠りはもう必要ない。
今こそ目覚めの時なのだ。
紗にも似た微睡みを護る繭が四散していくさまを、彼女はうっとりと見つめて呟いた。
「綺麗……」
そう、本当に綺麗だと思った。

それは無力な自分をずっと護り続けてくれた産着だった。
けれどその護りはもう必要ない。
目覚めて自分は全てを手に入れる——この世界を構成するものと、この世界を破壊するモノを。
なにより、自分という存在を。
今はまだ、何者でもない『雛』に過ぎない存在だけれど。
目覚め、奪って——自分は自分という存在を獲得する。
『雛の君』などという曖昧なものではない、確固たる自身を。
手元にあるのは緑の欠片、紫の欠片、白い欠片、赤い欠片……そうしてようやく届けられた金の欠片——我がものとし得る絶大なる力の欠片たち。
「さあ、わたしは目覚めるわ」
飴玉のような色とりどりの欠片のひとつ目を口に放り込みながら、何者でもなかった少女は歌うように呟いた。
最初に緑——生まれて初めて目にした色であったから。
ふたつめ以降は何でも良かった。
だから、無造作に選び取った欠片の色は赤。

次に紫、次に白。

金色の欠片は口にすると同時に手に入るとわかっているから、最初にしようか最後にしようか迷ったけれど、最後にした。

だって、それは極上の蜂蜜を思わせたから。

自分が生まれるにあたり、最後の決め手とするのに黄金の蜜は何より相応しいと……理屈ではなくそう思ったのだ。

そうして——そして。

『雛』と仮初めに呼ばれていた存在は、真実世界に誕生する。

纏う色彩を自分自身知らぬままに——。

※

世界唯一の対魔組織である浮城の住人がすべて特異能力者というわけではないことは、実はあまり知られていない事実だ。

世界各地の情報を集める者、事務を担当する者、負傷者を治療する者——等々、実戦に投入されることがない住民は少なからず存在する。

その多くは子供の頃に資質を買われて引き取られたものの、力及ばず資格を取れなかった者たちなのだが、彼らはそのことを卑下することなく『自分のできる仕事』に誇りを持って当たっていた。戦いに赴く捕縛師や破妖剣士を見る度に、彼らの胸に痛みが走るのは確かだったが、浮城の円滑な運営のためには縁の下の力持ちが必要不可欠なのだと、常々上層部でも最上位にある人物が繰り返し口にしてくれたから、矜持を以て危険な任務に向かう者たちを全力で支えようと思えるようになったのだ。

たとえそのひとが病を理由に引退しようと、教えられ胸に刻んだ誇りを忘れるわけがない。

彼らは務めを果たすことに何の躊躇いもなかった。

……少なくとも一年ほど前までは。

それは、世界を取り巻く状況が変わりすぎたせいだともいえるが、それだけでないことも確かに彼らは感じ取っていた。

※

「……胃が痛いわ……」

苦しげに声を洩らしたのは、『飛び込み』の依頼主の応対に当たる部署のひとりの女性だっ

た。

同僚たちは同情に堪えないといった様子で彼女に声をかける。

「白砂原で保護された……んだっけ？」

「確か村が魔性に――って譫言で繰り返してたんだっけ」

「最近珍しくないけどな」

「……ご愁傷様」

たっぷり同情的な言葉はかけられるものの、それ以上の申し出をする者がいないことに気づいて、みぞおちの少し下の部分を手で押さえていた女性は恨めしげに同僚を睨みつける。

「胃に穴が空きそうな同僚の負担を少しでも減らしてやろうとか、誰も思わないわけ？　ああ、なんて薄情な同僚たちなのかしら!?　わたしがこれまで培ってきたのは、こんなにも薄っぺらい人間関係でしかなかったの……っっ!?」

大仰に嘆いて見せたところで、周囲の反応は変わらない。

「あなただって、同じ立場になったら代わってやる気なんてないくせに、他人にばかり多くを望むのはやめなさいね」

冷ややかな声で言いきるのは、先日同じような弱音を吐いていた同僚だ。

その時は確かに自分も同情的な言葉をかける以上のことはせず、憂鬱そうな相手を気の進ま

ぬ場所へと送り出したのだ。

……自業自得というべきか。

しかし、はるばる白砂原を渡ってまでこの浮城に助けを求めてきた者との対面を億劫に思わざるを得ない事情があるのだから胃が痛くなるのも仕方ないと思うのだ。

そして、同僚は皆多かれ少なかれその事態に疲労を覚えている。

これも仕方ないことだ。

決して納得したくはないことだが、無理矢理にでもそうしなければやってられない日々がこのところ続いている。

「……ああ……また胃が……」

つきり、と刺すような痛みを覚え思わず顔を顰める彼女に、さすがに心配そうな声がかけられた。

「やだ、本当に大丈夫？　もしかして、またお断り確定物件なわけ？」

不謹慎な言葉にも拘わらず、その声には深い嘆きの色があった。

お断り確定物件――それは断らざるを得ない依頼を指す隠語……というか造語だ。

ごく稀にではあるが、魔性のなかには浮城の特異能力者の力を以てしても対応できない特殊な影響を周囲に及ぼすモノがいる。

記録に残されているもので有名なのが、肉体を捨て目当ての人間の肉親の血液そのものに溶け込み、獲物とした相手を手に入れるためにその人物と血の繋がりのある人間を無作為に支配し異形の化け物に変えつづけたというものだ。

滅ぼすべき肉体を捨てた魔性を滅ぼすことはいかな破妖剣士にも不可能なことであり、またその命を封じようにも存在全てを人間の血に溶かし込み同化した魔性のそれだけを封じることはいかなる捕縛師にもできず――その調査結果が上がってきた時、浮城は依頼を断ったのだと伝えられている。

しかし、今彼女たちが話している『お断り確定物件』はそれとは意味合いが違う。

多すぎる依頼に応対しきれないが故に断らざるを得なくなったものを指している。浮城の実戦要員の数が無限でない以上、それは仕方のないことだ。被害の大きな依頼を優先せざるを得ない上層部の判断もわからないではない。

しかし――。

「もしかしたら違う判断が下るかもしれないけど……移動時間がとんでもなくかかりそうな山間の村なのよね。しかもすぐに滅ぼされるという話でもないってことで……」

聞いたところ、その村の外れには数年前から妖鬼が棲みついたのだという。

そのことに気づいたのは村の子供がある日突然消えたことがきっかけだったのだ、と傷だら

けになりながら辿り着いた男は語った。
以来年にひとりかふたりの子供が消え始めた——何者が何の目的で子供を攫ったかは明らかだ。
あるいは妖鬼が住処を変えてくれるのではないかという願いも空しく毎年子供は減るばかり……このままでは村の子供は全て妖鬼に食い尽くされてしまう——という結論に達した村人たちはなけなしの蓄えを出し合い、浮城に助けを求めてきたのだ。
「……それは、確かに限りなくお断り確定に近いわねぇ」
ふう、と憂いをこめた息を洩らして同僚が同意した。
「でしょう？」
「せめてこれが一年前なら、まだここまで騒ぎも多発してなかったし、上も考えたでしょうに……それか、最初の被害が出た時なら、まあ確実に受けたでしょうに……」
だがそれを言うのは酷であることも彼女にはわかっている。
世界唯一の退魔組織——浮城の依頼料は決して安いものではない。魔性の気まぐれに期待して嵐が過ぎるのを待つ村や町は少なくはないのだ。
そうした村や町の人間がこれ以上は耐えられないと、広大な白砂原を渡って浮城を目指してくる——その思いの強さはいかばかりか。

想像できるだけに、昨今の事情が切なくも恨めしいのだ。

「せめて、この村がガンディア……は最近微妙だけど、マグァーラ帝国の領土だったりしたら話は違うんでしょうけどねぇ……」

それならば、国そのものが依頼に噛んでおらずとも、上層部が依頼に応じる可能性はある——大陸最大の版図を誇る大帝国は浮城にとって最高の支援国なのだから。

しかし、そんな事実もないちっぽけな山間の村の妖鬼など、今の浮城にはかかずらっている余裕はない。少なくとも城長であるアーヴィヌスはそう判断するだろう。

その判断に是非を唱える権利も資格もないことはわかっているし、城長としては当然の決断だと思いもするのだが、割り切れない思いが湧き上がるのは如何ともし難い。

以前は、こんなことはなかった——。

ふと洩らしそうになる言葉を慌てて呑み込んで、彼女はのろのろと立ち上がった。

どんなに気が進まずともこの依頼に関する書類を作成し、上に提出しなくてはならないのだ。たとえ目を通した直属の上司がため息をつこうとも、手順は踏まなければならない——そして、最後の希望に縋るようにぼろぼろになってこの地に辿り着いた依頼主に、絶望しか与えない答えを与えるのも自分の役目なのだ。

やりきれない……。

最近、こんなことばかりが増えているような気がする……。
そう思った時のことだ。
「ふぅん、で、その山間の村って、どこにあるわけ？」
気軽な口調で問いかけてくる声が耳を打った。
「どこって……イリヤンって小国だけど……」
なんでそんなこと聞きたがるわけ？
上は断るに違いないのに――と言いかけた彼女の視界に映ったのは、さらりと揺れる砂色の柔らかそうな髪だった。
ぎょっとした。
砂色の髪のそのひとは、本来この部屋に立ち入るべきではない人員――紛れもない実戦要員に数えられる相手だったのだから！
「サ、サティン！」
どうしてここに？
問いかける声が裏返ってしまうのは致し方ないだろう――サティンは浮城でも指折りの捕縛師であると同時に上層部から危険視されている要注意人物なのだから。
しかし、当のサティンは涼しい顔だ。

「んー、言うなれば配達？　うちから万能軟膏が届いたものだから。いっぱい注文してくれて、わたしとしてもありがたいわ」

にこにこ笑う彼女の右腕には、軟膏の入った容器がてんこ盛りの籠が抱えられていた。

それを見て、室内の幾人かが歓声を上げた。

「やったわ！」

「よかった、昨日使い切ったところだったの」

サティンの実家が経営する薬・香草園で作られる軟膏や化粧水は浮城の一部女性に大人気なのである。

しかし、これまで彼女が『配達』などという行為を取ったことはなかったはずだ――一体どんな心境の変化なのか。尋ねてみると、答えはなんでもないものだった。

「ああ、仕事が入っちゃって明日から出かけるのよ。その前にお届けしておこうかなと思ってね。お得意様は大事にしなくっちゃ」

悪戯っぽく片眼を瞑る仕種は大人の愛らしさとでも呼ぶべきものが溢れている。

そうして籠の中身を『配達』し終えると、別に何か探りを入れることもなくあっさりと部屋を出ていった。

ほっとしたような拍子抜けしたような奇妙な気分に見舞われた一同だが、そういえば、と思

い出したようにひとりが口を開いた。
「あのひととセスランさまだけは、単独任務が許されているのよね」
「そうそう。一年前ぐらいまでは絶対ひとりでは外に出してなかったのにね」
「それはあれじゃない、紅蓮姫が外に在ったころだから目を離すわけにはいかなかったとか……捕縛師としては浮城で五指に入る実力者なんだから、特にチームを組む必要とかないひとたちなんだし」
「ああ。あのひとたち、あのひとと親しかったしねぇ……」
「上も現金よね。紅蓮姫が戻った途端、今度はピンで仕事押しつけるようになっちゃって」
あのひとたち、正に三面六臂の活躍ぶりよねぇ……。
感心というよりは呆れを孕んだその声に、何か引っかかるものを感じたのか、複雑な顔になったひとりが首を傾げた。
「どうしたの？」
その様子に気づいたらしい同僚の言葉に、その女性は「うーん」と小さく唸りながら口を開いた。
「いえ、ね。何の脈絡もないんだけど、急に思い出しちゃって……」
要領を得ない返答に、「なにを」と促した者に他意はなかったに違いない。

そう、首を傾げた当人すら、自分がこれから語る内容がなにを引き起こすことになるのか想像もしていなかったのだから。

「……この間、おかしな手紙が届いたんだけど、そういえばその送り主の住所が、サティンじゃないけどセスランさまが仕事に向かった場所と近かったなぁって……」

緊張を孕んだ水面に投じられる——それは確かに最初の一石となる。

2

白砂原に吹く乾いた風に、少しだけ変化を認めてアーゼンターラは思わず胸に手を当てた。浮城が影を落とす白砂原の外れに住むという女性を訪ねるのは初めてだ――どうしても緊張してしまう。

サティンなり誰かについて来てもらえばよかっただろうか。

一瞬浮かんだ考えに、彼女は反射的にかぶりを振った。

それは駄目だ――筋が違う。

いくら顔を合わせづらい事情があろうとも、自分で決めたのだ――一度きちんと挨拶をしようと。

かつて浮城を率いていた城長であり、自分の命を救ってくれたあのひとの養母だったひと――マンスラムと会うことを望んだのは自分なのだから。

乾いた風に含まれる微妙な水の気配を辿ってアーゼンターラは足を進める。白砂原の外れと

はいえ緑は決して多くない。

そのひとの家を探すなら、この水の気配を辿ったほうが確実だ。病を理由に城長を辞したひとだ、水場から離れたところに住まいを構えたりはしないだろうから。

話したいことは山ほどあるが、何から口にすべきかはまだ決められないままだ。

――紅蓮姫をお借りしています。

その一言だけは決めているけれど、他のことに関しては全くの白紙に近い。考えるのが恐いというのもある。

一年前、浮城に戻るなり紅蓮姫の使い手に認められた時、あんなにも力を望んでいたはずだというのに最初に覚えたのは困惑と漠然とした不安だった。

紅蓮姫の使い手はちゃんと別にいるという思いが、アーゼンターラにはあったのだ。

そして、その数日前に暴走した破妖刀を抑えきれずに他者を傷つけた記憶は鮮明に脳裏に刻みつけられていた。

本来の使い手が仮死状態に陥っているからといって、満足に御することもできない自分が彼女を預かっていいものかどうか……そのことを、あのひとのそばにいた者たちはどう感じるだろうかという恐れ。

お前などにそんな権利があるものかと糾弾されるのではないのか。たとえそう声高に告げず

とも冷ややかな視線と態度で自分に思いをつきつけるのではないか。

結果的に、それはアーゼンターラの杞憂に終わった。

あのひと――ラエスリールと特に親しくしていた面々は、自分が紅蓮姫の次の使い手に選ばれたことを知っても特に……というよりは全然態度を変えなかったのだ。

逆に心配された時には身の置き所のなさを感じたほどだ。

『紅蓮姫の暴走を実際に見たことはないけど、話は聞いたから……トーンじゃない、アーゼンターラが心配だわ。特にあなたの護り手は彼女にとって極上のご馳走だから、敵の魔性じゃなくあなたの護り手に襲いかかろうとした挙句、肘なり肩なり脱臼させる……なんてことが起こらなきゃいいんだけど』

しみじみとため息まじりにそう零した砂色の髪の捕縛師の女性の言葉には、杞憂の一言では片付けられないものが宿っていた。

『ひとつだけ忠告させていただくなら、たとえ紅蓮姫が暴走しても間違っても自分の体で止めようなどとはしないことです。破妖刀は魔性には確かに絶大な殺傷力を発揮しますが、生身を傷つけないわけではありませんからね』

涼しげな声でそう告げてきたブロンズの髪の青年の表情は、「どうせ言っても聞きやしないのだろうけれど」とでも言いたげな諦念を漂わせたもので、彼女にはかなり心外だった。

そんなことしません、と即答するも「そうであることを願いますよ」と今ひとつ信用していない言葉を返されちょっとむっとした。

そんな彼女に最後に声をかけたのが大輪の薄紅の薔薇の蕾を連想させる金髪の美少女だった。

『まあ、死にたがってるとしか思えないような行為にさえ走らないでいてくれればいいんじゃない？　自分が暢気に眠ってる間に紅蓮姫のせいで人死にが出たなんて知ったら、あの馬鹿は落ち込んでどこまでも深い穴を掘るに違いないのだし』

小国とはいえれっきとした一国の公女が口にするにはいささか不適当な表現が多々混ざっているような気がしたが、それを聞いてアーゼンターラはほんの少しほっとした。

彼ら三人が自分のことを気遣ってみせるのは、結局ラエスリールの魂が肉体に戻ってきたときのことを考えてのことなのだと理解したからだ。勿論、面倒見のいいサティンや人当たりの良いセスランのことだから、真実自分のことも心配してくれているのだろうけれど。

ああ、このひとたちはあのひとが死んだとは思っていないのだ。

そのことが何よりアーゼンターラの心を軽くしてくれた。

アーヴィヌスやスラヴィエーラは、ラエスリールを『死者』として扱っている。朽ちぬ肉体はそばにいた強大な魔性の術のおかげだろう、と。

朽ちぬ死体などではないことを、アーゼンターラは感じている。だが、それをどう伝えればいいのかがわからないのだ。

なにより、スラヴィエーラはともかく城長はこの現状を歓迎している。

下手にそこに触れるのが危険な行為であることぐらいは彼女もわかっているから、言いたいことも言えずに胸の内に抑えこんできたのだ。

あのひとは死んでいない！

叫びたいのに口に出すことさえ許されない言葉を、単なる言葉ではなく厳然たる事実として受け止めている人たちがいる。

そのことがどれほどアーゼンターラの胸に大きな安堵を生んだのか、彼らはきっと気づいてもいないだろう。

そのことを打ち明け、感謝の言葉を伝える機会も与えられることはなかった。

頻発する魔性被害に、魅縛師である少女を除く二人の捕縛師は忙しく世界中を駆け回ることとなり、自分も似たような状況に置かれたからだ。

ここまですれ違うとなれば、意図的な何かがあるとしか思えない。

その可能性に気づいた時、浮かんだのはアーヴィヌスの顔だった。

おかしなことではない。思えば彼はずっとあのひとに係わる情報から自分を遠ざけてきたの

だ。いや、それは自分に限ったことではないが、自分を特に遠ざけていたように感じるのは気のせいだろうか？

だが、それも無理からぬことなのかもしれない。

だから、今日のこの外出は絶対に上部には秘密なのだ。力溢れる妖貴であるとはいえ、未だ幼い蜜里にずいぶん無理を言って、今日ここに連れてきてもらった。

『あのひとは今はいないし、誰もターラが紅蓮姫を使うのを咎めない。なのにどうして会いに行かなくてはならないの!?』

泣きそうな顔で問いかけてきた護り手に、アーゼンターラは微笑んで答えた。

――必要なことだから。

「わたしが先に進むために」

知らず声に出した答えが図らずも彼女の意識を現実に引き戻した。

そして同時に耳に飛び込んできたのは落ち着いた声の女性と、まだ年端もいかぬ子供との遣り取りだった。

「おばちゃん！　花は摘んだけど、これぐらいでいいかな？」

「あら、素敵な花束ね」

一年ぶりに聞くその子供のやや低くなった声に、アーゼンターラは堪らず駆けだした。

息せき切って駆けつけたその場所で、一年前よりずっと艶やかな金の巻き毛を揺らす少年がきょとんとした顔でアーゼンターラを見返していた。
その瞳は記憶にあるよりやはりあざやかな明るい曇りなき緑――。
「……トーン兄ちゃん……？」
呆気にとられた様子のリーに負けないぐらいにアーゼンターラもまた呆然とした。
リーは……リーと呼んでいた少年は、一年の間に十歳前後の姿から二十歳前後のそれに化けていたのである。
そして、外見上に変化が生じたのは――少年ほど劇的ではないとはいえ――彼女にも言えることだった。
「トーン……もしかして、兄ちゃんじゃなくて、姉ちゃんだった……？」
「……リー。あなた、何を食べたら一年でそんなに大きく……」
なれるわけ!?
両者の上げた震える声は、ともに白砂原を吹き抜ける強い風に攫われた――。

※

「あらまあ」

呆然と立ち尽くすアーゼンターラを我に返らせたのは、素朴な驚きを孕んだ女性の声だった。

そちらに目を向けると、穏やかそうでありながら、どこかどっしりとした落ち着きをたたえた女性が箒と水桶を手に立っていた。

「あ」

「おばちゃん」

声を上げたのは彼女とリー――同時だった。

だが、さらなる言葉を紡いだのはリーだった。

「駄目じゃないか、おばちゃん！　水なんて重い物持っちゃ！　花も水もおれが持つと言っただろう!?」

そう言って、ずいぶん育った少年が慌ててその女性に駆け寄るのを、アーゼンターラは未だ動けないままに見つめていた。

「これくらい大丈夫なのに」

「だめだめ。おばちゃんに無理なんてさせたら、おれが旺李に叱られちゃうし！　いいから渡して。おばちゃんは手ぶらでいいの！」

そう言いながらリーが乱暴に彼女の荷物を取り上げる。
女性はそれに抗わない。背伸びしたがる子供を見る目は優しい。
ああ、このひとが――アーゼンターラは確信した。
このひとが前の城長――マンスラムだ、と。
「初めまして――」
アーゼンターラが口を開くより先に、マンスラムが声をかけてきた。
「あなたがアーゼンターラね？」
自分を見つめる眼差しは、リーに向けるのと同様優しい光を帯びている。
「あ、はい。初めまして……マンスラムさま」
「さまは要らないわ。わたしはとうに城長を退いた身ですからね」
尤も、本当にそのつもりならこんな所に住み着くなとアーヴィヌスあたりには言われそうですけどね。
くすりと笑う口元はどこか悪戯を企む子供を思わせる。
「あ、いえ、でも……」
ではどう呼べばいいのかわからずに口ごもると、リーが呆れたように口を挟んできた。
「おばちゃん、それは無理だって。兄ちゃ……じゃない、この姉ちゃんもあっちの姉ちゃん同

様頑固で融通が利かないから、ここはおばちゃんが大人になって好きなように呼ばせてあげないと却って困っちゃうよ」

なにやら随分な言いようだったが、当人は自分を援護したつもりなのだろう。

この物言いはどことなく浮城でもよく見かける白い青年のそれを思い出させる——無邪気にずけずけと思ったことを口にする件の青年は、そばにいる少女によく拳で殴られているが、さすがにマンスラムはこの少年に対して同じようなことはしないだろう。

何となく少年の将来が不安になった。いや、憎めない愛嬌があるから大丈夫だろうか……埒もないことをつい考えてしまう。

「仕方ないわねぇ……」

ため息まじりに肩をすくめ、マンスラムが踵を返そうとするのに気づいてアーゼンターラは慌てた。

花、箒に水桶——マンスラムはどこかへ出かけるつもりだったのではないだろうか。自分が来たせいでそれを邪魔したのに違いない。

「マンスラムさま！　すみません、ご都合も考えずに押しかけてきてしまって……日を改めますから……」

どうかお出かけになってください。

そう言うと、マンスラムは少しだけ考え込む様子を見せた。
「わざわざ日を改めることもないでしょう……あなただっていつ次の仕事が入るか知れない身なのだし。そうだわ、迷惑でないなら、少しわたしにつきあってくれないかしら？　すぐ近くだから」
切ってしまったお花を無駄にするのは勿体ないでしょう？
マンスラムの言葉に躊躇ったのは一瞬――アーゼンターラはすぐにうなずいた。彼女が言った通り、今日を逃せば次にいつ会いにこられるかわからないというのが正直なところだったからだ。いつ仕事が舞い込むかわからない――のではなく、すでに次の仕事の話は決まっている。明後日の出立前に、どうしても会いたいと思って今日ここへ来たのだから。
「もしお邪魔でないのでしたら……」
「邪魔だなんて。お客様は大歓迎よ」
にっこり笑って答えるマンスラムに、病の翳りを見いだすのは難しかった。
そうして三人で向かった先――小さな泉のほとりにあったのは、小さな塚だった。
「親友の墓よ」
もっとも――と続けられた言葉は小さく、アーゼンターラの耳には届かなかった。

※

「変なの」

墓だと言われた瞬間、リーは顔を顰めて言い放った。

「リー！」

亡きひとが眠る場所を指して『変』とは失礼じゃない――叱りつけるが、少年は悪いとは思っていないらしく「だって」と口を尖らせた。

「だって、じゃないでしょう⁉」

「だって、どう考えても変だよ。お墓だっていうのに、この下は空っぽだ。何も埋まってないのにお墓だなんて変じゃないか」

遺体が埋まっていないとリーは言っているのだろうか。

しかし、そういうことがないわけではない。マンスラムは親友と言った。では浮城の同僚だった可能性が高い。もしそのひとが若いころに亡くなったのであれば、魔性に殺されたことも考えられる。そうなら……遺体が残らないことだって充分にあり得ることだ。

「そういうことだってあるのよ。マンスラムさまにとって、ここはお墓なんだから、それをおかしいとか言ってはいけないの」

墓は死者のためのものばかりではない。
生き残った者にとってこそより必要なこともある。
骨ひとつ残らず灼き尽くされた故郷の村――いつか、自分も中身のない両親の墓を作るだろう……取り戻したリメラトーンとともに。それは決して無意味なことではない。
そんな風に少ししんみりした気分で墓標の石を見つめていると、マンスラムが苦笑まじりに告げてきた。
「……一年前までは空っぽなんかじゃなかったのよ」
意外な言葉にアーゼンターラは目を瞬かせた。
「一年前、ですか？」
それまでは空っぽではなかったというのなら、親友というひとの亡骸は別のどこかに移されたということだろうか。
しかし、墓を暴くような真似をこのひとが許すだろうか。それとも移すだけの充分な理由があったというのか。
そんな疑問が顔に浮かんだのだろう――マンスラムはふう、と息をついた。
「彼女の旦那さまがね、取り返しに来ちゃったの……鳥肌が立つほど綺麗で恐ろしい旦那さまでねえ、『返してもらう』と言われたら、返さないわけにはいかなかったの。彼女を抱き上げ

る姿は一幅の絵にも似て最高の眼福ではあったけれど……いままで放っておいたのに、突然取り返しにくる身勝手さには少し腹が立ったわね」

怒っているのか呆れているのか——淡々と語るマンスラムの表情は読めない。

しかしアーゼンターラはその内容に首を傾げた。

気のせいでなければ、ずいぶんおかしなことを聞いたと思ったのだ。

埋まっていた遺体をその夫であるというひとが抱き上げた姿が一幅の絵——？　しかも最高の眼福？

なにをどうすれば、そんな言葉が出てくるというのか。普通に考えれば、葬られて間もない状態でなければ、人間の体は土に還るはずだ。骨だけは長く残るが——深く考えるのが恐ろしくなり、アーゼンターラは意識を無理矢理切り替えた。

が、彼女のそんな努力は無邪気で素直な——この件に関しては考えなしと言ってもいいだろう——少年の言葉で水泡に帰した。

「なに、そのひと奥さんの骨を抱きしめたの？　う、麗しい夫婦愛と言えば聞こえはいいけど、おれだったら見たくないな……っ痛っ！」

周囲への配慮を知らない少年の口を閉ざしたのは、意外にも慈愛の化身を思わせる笑顔の女性だった。

にこやかな顔はそのままだったが、瞳が笑っていない。少年の後頭部に見舞われたのは、錯覚でなければ平手ではなく拳だった。

「勝手にひとの親友を白骨扱いしないでちょうだい。言っておくけれど、腐乱死体なんて想像したら許さないわよ」

そんなものを眼福だなんて、わたしが口にするはずがないでしょう――。

マンスラムの怒りがどこに向けられているのか、その言葉でよくわからなくなった。だが、同じ事を思っていたことを明かして自分にまで怒りを向けられるのは遠慮したかったアーゼンターラは不幸な少年から薄情にも目を逸らした。

疑問は残る――しかし、突くのも恐い。

この話題には蓋をしてしまった方が得策だろうか――そう思っていると、マンスラムがぽつりと呟いた。

「魔性の力というものは、人間の想像を容易く凌駕するわね。土に還る運命さえ容易く凍らせて……魔王たちはそれほどの力で世界に何をもたらそうとしているのかしら」

独り言のようなその声に、アーゼンターラは氷室に眠るラエスリールの姿を思い出した。

一年が経とうとも髪一筋変わらぬその肉体……魂さえ戻ればすぐにでも起き上がりそうな――まさか、とアーゼンターラは思った。

ここに眠っていたというひとも、ラエスリールと同じ状態だったのだろうか。そして、それを為したのはマンスラムの言葉を信じるならば魔性の王――妖主だと……？

だとしたら、その意味するところは何なのか。

単なる親友の墓参りにつきあわされたのではない。マンスラムは何か重要な情報を伝えるために自分をここに連れてきたのではないのか……。

しかし、前の城長であった女性はそれ以上何も言わなかった。

あとは自分で考えろということだろう。そしてアーゼンターラもそのことに否やはなかった。答えは自らつかみ取るべきものだ。そうでなければ先に進む力にはならない。

おぼつかない足取りであっても一歩一歩踏み出していかなければ、弟には辿り着けない。彼を捉えた妖貴が何者なのか、どの妖主に仕えているのかも……そうしてその妖主が何のために自分を欲したのか、何もかもがまだ謎のままだ。

だから、魔性に関する情報は何であっても拾い集めるべきだ……そう、そのためになら何でもすると自分は決めたはずではないか。

借り物の破妖刀であろうと過去の自分であろうと、なりふり構わず利用すると。

ならば、マンスラムに自分を認められるかどうかを問うのは無意味だ。大切な養い児が原因不明の仮死状態に陥った状況をまんまと利用して紅蓮姫を手に入れた――そう見なされても仕

方ない自分の状況をどう感じているのかと気にするのは彼女に対する甘えでしかない。
もしかしたらマンスラムはアーゼンターラが自分を訪れた理由などとうに見抜いていたのかもしれない。
そして、慰めや気休めのような励ましの代わりに、先に到るに重要かもしれない鍵を渡してくれたのではないか。
穿ちすぎかもしれない。正解かもしれない。
どちらであるかは自分が確かめればいいことだ。
そう思うと心が少しだけ軽くなった。マンスラムからのお茶の誘いを丁重に断ると、アーゼンターラは急いで浮城に戻った。
現在身近にいる最も多くの情報を握っているだろう白い青年を呼び出してもらうために――向かったのはカラヴィスの公女の部屋だった。

3

その短い遣り取りが、戦いの始まりを告げる合図だった。

「御免被る」

「跪きなさい」

※

何物をも灼き尽くす白焔が満たす空間に、白焔の妖主が艶然と佇んでいた。

純白の髪は炎に揺れ、銀の双眸は余裕の色をたたえていた。

圧倒的なその美しさに、もしも今の彼女を目にする者がいたならばこれこそが力と美の化身だと感嘆したに違いない。

「他愛もない」

短く吐き捨てるような声までもが澄んだ響きで世界を酔わせる。
傲岸なまでの誇り高さ――それが何より似合う女性は、はらりと長い髪をかき上げるとくるりと踵を返しかけ、眉宇を顰めた。
ひゅ、と白焔を切り裂いて飛来した何かが彼女の頬を掠めた。
シミ一つない滑らかな皮膚に一筋の傷が走る。反射的に振り返り、白焔の妖主――白煉は小さく舌打ちした。
「大言を吐いただけのことはあるか」
「主に対して不敬な言葉だわ」
答える声はまだ年若い少女のもの――真白の炎がぽっかりと一部消滅し、姿を現したのは漆黒を纏う娘だった。
長く波打つ髪も大きな双眸もぬめるような闇の色をたたえている。
その色彩だけを見るなら、少女は妖貴に過ぎない――妖主たる白煉に戦いを挑むこと自体あり得ないことだった。
しかし、少女は妖貴ではない。すべての色彩……否光さえも貪欲に吸い込む闇色を纏う紛れもない白煉と同等の存在だった。
第六の妖主にして、全魔性の頂点に立つべく定められた者。

翡翠の妖主の消失と同時にこの世に誕生した世界の絶対主だ。

その事実は存在そのものに刻まれており、白煉とて疑うものではない。

しかし、そう定められただけの相手に膝を折るほど彼女の誇りは安くはなかった。

魔性は力と美に従うもの——我が忠誠を望むなら、その力を示しこの膝を折らせるがよかろう……高らかに宣言すると同時に戦いの幕は切って落とされた。

相手が動くより先に高熱の炎を叩きつけたのは先手必勝というよりは挨拶代わりだ。いかに生まれて間もなくほとんど経験を持たないとはいえ、その程度で消失するなら存在する価値もない。

だから闇色の少女が無事であったことに対して別に何ら感慨はない——相手が完全な無傷であったのに比べ、自分がかすり傷とはいえ負ってしまったことには非常な不快感を覚えるわけだが。

しかし、そんなことはわざわざ口にする必要はない。

目には目を——否、誇りにかけてそれ以上を。

白煉は白焔を鞭と変え、少女目がけて振り下ろした！

しゅん、とその鞭の先が消え失せる。

何をした？　相手の力を読み解くために、すべての事象は把握しておくべきである。白煉は

解答の候補を絞った。

振動の凍結による炎の消去か、炎を奪われ支配下に置かれたがゆえの消失か——どちらの可能性の方が高い？

「なにを考えこんでいるのかしら？」

集中してくれなくては——。

拗ねたように微かに唇を尖らせて、まるで人間の小娘のような顔をして、闇の化身が右手を振るった。

ひゅん、と風を切る音とともに、何かが左の手首に巻きついた。

炎の鞭——自分のそれを写し取ったものに違いない。

「どこまでも物まねしかできないのか……借り物の力を纏うお前は昔話に出てくる道化鴉だな。他人の羽でいくら装おうとも、孔雀にはなれない」

嘲りはない——ただそれでは従えないと思うだけだ。

少女がに、と笑った。

「その麗しい唇から洩れるのが憎まれ口ばかりとは嘆かわしいわね。けれど、ならば借り物ではない力で貴女を屈服させましょう」

言うなりその形の良い長い指が、くいと何かを引くように曲げられた。

途端に手首に走る痛みに、白煉は締めつける鞭の中心に自分のものではない力の気配を感じた。

糸か。

借り物ではないと言いながら、紫紺の妖主の力の写しを使うのか。

「笑止。このようなもの！」

糸は燃えるもの——たとえ燃えぬ物であろうと融かすことはできる。

炎の芯の糸など自分を脅かす切り札とはなり得ない。

燃やし尽くしてやる！

手首を無色の炎で包む——高温すぎて、すでに色彩を纏わぬそれはどこまでも高めることが可能だ。

が、次の瞬間白煉は驚愕に目を瞠った。

燃えないし、融けない——何より取り戻すことなど容易いはずの炎の鞭が、自分の支配下に戻らない。

「何だと？」

くすり、と少女が笑みを零す。

「言ったでしょう、わたしの力は借り物だけではない……けれど、本当にあなたは美しい。そ

の愚かしいまでの誇り高さまでもが眩く輝く光の化身を思わせる……」

その声に宿るのは純然たる賞賛の響きだ。

しかし高見から見下ろすように言われたところで嬉しくも何ともない。

「愚かしくて結構だ」

言うなり白煉は右手で炎の鞭を摑んだ。

他者の支配する炎の熱は彼女の肌を襲ったが、構わずそれを引きちぎる。白焔の妖主ともあろう者が炎で火傷を負うなど笑止千万だが、仮にも全魔性の王たる運命に生まれ落ちた相手であれば無理からぬこと。

その程度には少女を認める気になっていた。

しかし、引きちぎられた鞭はそのまま彼女の右手に絡みついた。先端が幾つにも裂け、皮膚を破って内部に侵入し始める！

じわじわと肉を灼きながら鞭が伸びる先を自覚した瞬間、白煉は迷うことなく自らの右腕の肘から先を切り落とす！

しかし塞がりきれぬ傷口に、今度は漆黒の蔓が潜り込む——やはり、狙いは右の肘。心臓のひとつがそこにある。

「させるものか！」

叫んで彼女は自らの右肘を——心臓……宿る夥しい数の命ごと灼き尽くした！

さすがにこれには少女も驚きを隠せない様子だった。

「なんということを……」

咎めるように眉宇を顰める。

少しばかりの勝利感に空しいと知りつつ白煉は笑った。

「貴様に馳走してやるぐらいなら、灰も残さず灼き尽くすほうがましだ」

「なんて素敵な矜持でしょう……残念だわ、貴女を従えるためにその類い稀な誇り高さを挫かねばならないだなんて……本当に、残念だわ」

少女が嘆くように呟いた刹那、きん、と無音の何かが白煉の脳裏に響き渡った。

なんだ、なにが——。

思った時には目の前に少女の顔があった。

声を上げる間さえない——少女の指が白煉の残された左手の指に絡められる。

「美しい指だけれど、仕方ないわ……ここに貴女の命がある。わたしにはどうしてもこれらが必要なのだから」

痛みも衝撃もなく——しかし白煉はその刹那、自らの心臓に宿る命が少女の中に流れ込んでいくのを感じた。

そして、身動きすることも許されぬ拘束が彼女を捕らえる。自らのものであるはずの白焔は今や完全に少女のものとなっていた。

無数の『白焔の糸』が白煉の全身を搦め捕り、彼女は空中で磔にされた。

そして、勝利を確信した少女がにこりと笑った。

「ねえ――」

銀の瞳を覗きこむのはこの世のあらゆるものを呑み込む深い闇の双眸……限りなく虚無に近しい、だが似て非なる輝きに心が敗北を認めてしまう。

「これでもまだ、わたしを認めてはくださらない、第五の御方？　貴女の次に生まれた魔の王をどうしても認めてくださらないというのなら、わたしはあなたの命だけを戴くしかない。それは避けたいところなのよ。だって貴女の誇りはとても心地よい……少ない命数を惜しむあまりに戦うことさえ放棄して下った何処かの恥知らずとは段違いなのですもの」

少女の言葉に、白煉は即座にそれが誰かを確信した。

戦わずに下りそうな輩には複数心当たりがあるが、その内命数が少ない者といえばひとりしか該当する存在はない。

そうか、と彼女は思った。

そうか、あれは戦わずしてこれに下ったのか、と。

それは実にあり得そうな話であり、白煉は思わず口元に笑みをたゆたわせた。
「第五の御方？」
「……いや、実にあの男らしい……そう思ってな」
この言葉に少女は少しだけイヤそうに顔を顰めた。
「……何方も同じ事を言いましたわ。嘆かわしいこと……あれが来るべき……で次位の座に就くことになるだなんて……」
深く息をつきながら、少女は何度かかぶりをふった——そうして、再び問いかけてくる。
「それで、貴女の選択は、五番目に生まれた炎の御方？　わたしを認め、わたしに従ってくださいますか、それとも——」
最後の心臓ごとわたしに取り込まれることをお選びになる？
懇願の響きすら宿した甘い声に、白煉はふっと全身の力を抜いた。
ゆっくりとかぶりを振った後に口を開く。
「従えたくば膝を折らせて見せろと言い出したのは妾だ。この圧倒的敗北を認めず前言すら翻すようでは貴女が褒めてくださった我が矜持までもが地に堕ちる。貴女を認め、貴女に従おう……世界最後の魔性の王にして、新たなる世の全魔性に君臨する唯一の魔王よ」
戒めを解いてくれれば跪くのだが——。

告げた言葉に少女は小さな息をついた。それは安堵のそれだったのか、単に緊張の終焉を告げるものに過ぎなかったのか……謎は謎のまま、少女が微笑んだ。

それは花が綻ぶような、艶やかでありながら見る者に不安と恐怖を覚えさせる不可思議で不可解な笑顔だった――。

※

エトラトはかつて呪われた地と呼ばれていた。

それはエトラトが人間ではなく魔性に大きな恩寵を与える土地であったためだ。

エトラトに生まれた人間はよほど生命力が強くなければ成人することがかなわなかった。一方この地に逃げ込んだ魔性はたとえそれが満身創痍の下位妖鬼であろうとも絶命に到らせることはできなかった。

まるで人間の命を吸い取り、代わりに傷ついた魔性に力を与える――魔性にとっての楽園であるかのよう。事実、一時期エトラトから人間は去り、浮城でさえも手出しできない『禁断の地』として扱われていた。

だが、それは正しい解ではなかった。

人の気配の消えたエトラトは魔性にとっての恵みの地ではなくなった。逆に傷つき逃げ込んだ魔性の命を吸い上げ奪う魔性殺しの地へと変貌した。

その事実がある浮城の住人によって明らかにされたあと、エトラトには再び人間が集い始めた——過去の事実を知る者も少なくはなく、あまり数は多くはなかったが。

そうしてかれこれ三十年。

いかなる運命の悪戯か、エトラトは再度魔性の楽園へと化していた。

楽園の祝福を受けた妖鬼——深鱗はご満悦だった。

名前の示す通り水と縁深い彼は住処としていた池を酷い干魃で失い、何年も地を彷徨った。住処が干上がったことでただでさえ衰弱した体は日々弱り衰えるばかり——力に溢れた水場にはすでに先住者が存在し、わずかな恵みしか望めない。

このままでは全身の大部分を覆う鱗が乾きはげ落ち死んでしまう——そうした状態に陥ったところで、一か八かの賭けとして深鱗はエトラトを目指したのだ。

いや、正確に言えば死に場所を彼は探していたのだ。だが長く苦しむのはいやだった。魔性の命を啜り取るこの地であれば、余所で干涸らびるよりは楽に死ねるに違いない。そう思っての決断だった。

しかし魔性を殺すはずのエトラトは逆に深鱗を生かした。それどころか大きな力を彼に注い

でくれたのだ。

干涸らび剝がれ落ちる寸前だった彼の鱗は見る間に潤いを取り戻し、枯渇しかけていた力はエトラトに雨が降る度溢れんばかりに注ぎこまれ、今では全身に漲っている。

彼にとってエトラトはまさに甦った楽園だった。この地に住む限り、最早飢えに苦しむことはなく、力の不足に歯噛みすることもない。

ぐぐ、と喉を鳴らしながら深鱗は目の前に倒れ伏す招かれざる客人たちを見やった。

自分を斃すためにこの地に招かれた三人の男女は浮城から差し向けられた捕縛師と破妖剣士だった。

人間の女の柔らかい肉が好物である深鱗は、近くの村からこれまで十人ばかりの女を攫って来ては味わうためだけの食事を繰り返していた。そのために村の住人が浮城に助けを求めたのだ。

しかしここは深鱗の楽園——かつては恐怖の対象であった浮上の破妖剣士すら容易くなぎ払う力を得て、深鱗は嬉しくて仕方ない。

ここに住まう限り、自分は無敵だ。破妖剣士すら敵ではないのだから。

命と力はエトラトの地が与えてくれる。美味な餌は近隣にまだまだ多い。自分はこの上ない幸運に恵まれたのだ。

そこで深鱗は目前に倒れている浮城の住人たちに意識を戻し思案した。

捕縛師のひとりは若い女だ。普通の女と比べてどんな味がするのか是非試しておきたいところだが、さて残るふたりの死に損ないたちをどうしようか？

生かして帰すのは論外だが、自分の力のほどを近隣の人間たちには知らしめておきたいところだ——浮城に助けを求めたところで無駄なのだと徹底的に刻みつけてやらなければ。いや、しかし浮城の女が美味だった場合、二度と味わえなくなるのは惜しいかもしれない。

懲りずにまた餌を送り込ませるために命は取らずにおいてやったほうがいいか？

しかし、それもこれも全ては女の味次第だ。

倒れ伏した若い捕縛師のむき出しになった肩から流れる血の鮮やかさとその匂いに、深鱗はごくりと喉を鳴らした。

食欲とは違うが、猛烈にその血肉を味わいたい衝動が湧き起こる。逆らえない。

ずるり、と爬虫類を思わせる太い尾を引きずって深鱗は餌に近づいた。

鱗に覆われた指先が女の項に触れる寸前——その声は降って来た。

「まあ、いやだわ。情けないこと。エトラトの磁場周期の法則も、今時の子たちは知らないのかしら？」

声は若い女のものだ。

しかも甘い匂いが漂ってくる。確実に目の前の女より美味い女が現れたのだ。深鱗は嬉々として声のしたほうを振り返った。

果たして、そこにはひとりの女が佇んでいた。

その姿を目にした瞬間、深鱗は雷に打たれたような衝撃を受けた。

人間の美醜など彼にとっては意味のないものだった。そもそも人間は魔性と違い力と外見の美が比例しているわけではない。だから人間がどれほど美しかろうが醜かろうが、そんなものは大した問題ではない。

だが、今新たに現れた女に関してだけは話が別だった。

女は、美しかった。つまりは力に溢れた存在であるということだ。しかもその美も感じ取れる力も桁違いだ。最初に目に入った瞳の色がなければ、遙か上位の眷属だと認識したかもしれない。

漂う甘い匂いは深鱗の衝動を刺激し、視覚から読み取った情報は彼に危機感を抱かせる。どちらを重視するかで成り行きは大きく変わるだろう。

そろりと女の動きを窺いながら、深鱗は殊更ゆっくりと問いかけた。

「こいつらの仲間か？」

つまりは浮城の人間なのか――問いかけた彼に返された答えは否だった。

「いいえ、違うわ」

浮城の人間でないのなら、女から感じる力は自分を害するものではない。安堵してもいいはずだというのに、なぜか深鱗は不安を覚えた。

なぜだ、なぜ——間違いなく人間であるはずの女に、自分より遙か高みに在る方々に通じる恐れを感じるというのだろう。

女は一体何者なのだろう。

知らなければならない。そして、その正体によっては——。

そろりと足を引きながら深鱗は違う問いを放つ。

「お前は、何だ？」

女は答えない。

代わりにうっすらと形のいい唇に笑みを刷いた。

ぞくり、と深鱗の背筋に戦慄が走った。

自覚する。ようやく気づく——この女を見た瞬間、全身を駆け抜けた衝撃……あれは紛れもない恐怖だったのだと！

「なぜ、ここに来たんだ！」

恐慌を来した深鱗は決して口にしてはならない問いを放ってしまった。

得たり、と女が笑った。
「わたしがここに来た理由？」
嘲るように――同時に哀れむように女は深鱗を凝視した。
女を包む空気が色を……否、輝きを変える。眩く強く、それなのに目を離せない。逸らさなければ待っているのは身の破滅だと、本能が訴えかけてくるというのに、その美しすぎる魅惑的な力の波動に捕らえられて動けない。
「それは、愚かなお前を滅ぼすためよ」
敵だ――この女は圧倒的な力を宿す自分の敵だ。
倒せるか？　無理だ。到底自分の敵う相手ではない。ならば、せめて逃げなければ！
逃げろ、逃げろ――必死に自分を叱咤するも、深鱗は女から目が離せず、指一本動かすことができない。
そんな彼の状態を見抜いたように……いや、とうに知っていたかのように、女は艶然たる笑みを浮かべた。
「馬鹿な妖鬼。愚かな妖鬼。傷ついた身を癒すだけなら、このエトラトの地は永遠にだとてお前に力を与えたでしょうに。この地は揺籃。傷を抱く者を無条件に癒す場所……なのにお前は必要のない殺生を犯した。生きるためでなくただ口を楽しませるためだけに。禁を犯したお前

をエトラトはすでに護らない」

「馬鹿な……馬鹿な。それならなぜ、浮城の人間がこうまで容易く倒れ伏す!? おれは護られている！ ここはおれのための楽園だ！ おれはずっと、ここで生きるんだ！」

声を張りあげ、深鱗は必死に叫んだ。

女の言うことはおかしい。そう思うのに気づけば声を張りあげている。そうでもしなければ恐ろしさに全身が凍りついてしまいそうで——。

「言ったでしょう？ 磁場周期を彼らは把握していなかったの。知らなかったかしら——ねえ、深鱗？」

告げた覚えのない自らの名を口にされた瞬間、深鱗は今度こそ眼差しひとつ自由にならない呪縛に捕らわれた。

「このエトラトには一日に一度だけ、人間にも魔性にも害も益ももたらさない空白の磁場に変わる時があるの。季節や天候で微妙にズレはあるけれど——」

女の蠱惑的な口元が「いまがその時よ」と囁く。

「いやだ、いやだ、いやだ……おれは死にたくない！」

「お前がひとりの女も殺めていなければ、見逃してやることもできたでしょう。でも、駄目……お前は目先の快楽のために殺す必要のない相手を殺した。そしてそれを繰り返す……駄目

よ、駄目だわ。お前を生かして置くことはできない。わたしはお前が生き延びて新たに殺戮（さつりく）に手を染めるのを見逃すわけにはいかないの」

それは、絶対者の宣告だった。

なぜ人間にそのようなことが可能なのか、深鱗にはどうしてもわからなかったが、女の意志が自分の意志を摘み取るのをはっきりと感じた。

「散り果てなさい、深鱗」

絶対の命――抗（あらが）うことなど思いも寄らず無条件に従う心。

ああ、そうだったのか――散りゆく意識のなか、深鱗は悟った。

この女は……だったのだ。

第十四章　飢餓の街

1

日差しは強いとはいえ、草原を渡る風は涼しい。
小高い丘の上――大木の陰から澄んだ琴の音色が風に乗って響き渡る。
高く低く、低く高く、繊細な音が連なり美しい曲を構成する。
弾くのは金髪の美しい少女だ。不思議な金色の弦をつま弾く指は細く長い。波打つ長い髪を風の撫でるにまかせ、少女は琴を奏でつづける。
さわさわと風が吹く。
琴の響きを乗せて吹く。
一幅の絵にも似た美しい光景は、しかし突然演奏をやめた少女によってけたたましいものへと一変した。
「ちょっと！　なんでそんなとこで寝そべってるのよ、邪羅！　あなたを怖がって、ちっとも妖鬼たちが集まってくれないじゃないの！　自分のほうがうまくいかないからって、ひとの情

報収集の邪魔してるんじゃないわよ！」

噛みつくような声を投げかけた先には丈の低い草が茂るばかりに見えたが、不意にその空間に青年の姿が現れた。

「隠形してんだから気づかれっこないって。お前のぴりぴりした音に怖がってるんじゃないのか？」

むくりとその場に起き上がった青年の髪は乳白色、瞳は淡い藤色だ。

一目で人外とわかる異様なまでの美貌の主は、せっかくの外見を裏切る口調で反論する。

「ぴりぴりしてるのはあなたでしょう!?　隠れてたって苛立った気配がびりびり伝わってくるわよ！　そんなんで上級魔性だなんて笑わせるわね。彩糸ならわたしでも気づけないぐらい完璧に隠形するわよ」

未熟者と面と向かって言っているも同然の言葉に、青年が麗しい顔を無残に顰めた。

「ひとのことが言える身かよ？　苛立ち満載の演奏しやがって、あれじゃあのこのこ寄っていったが最後、思い切り八つ当たられるの目に見えてるじゃねえか。いっそお得意の歌まで添えたらどうだ？　ところどころ思い切り外れる音程が愛嬌になって間抜けな妖鬼がかかってくれるかもよ？」

青年の痛烈な皮肉に、今度は少女の美しい顔が怒りに歪む番だった。

「い、言ったわね!?　わたしの劣等感を思い切り掻きむしってくれたわね!?　わたしだって……わたしだって、歌うだけなら音程は外さないわよ！　指の動きに注意を取られた時にぽろっと外すぐらいで……」

それでも歌が苦手なことには変わりない。

「今じゃ歌声にも魅縛の力が宿ってるのに、ほんと宝の持ち腐れだよなぁ。ま、おれは個性的な歌声もけっこう気に入ってるけど」

琴の音で魔性を魅縛する少女は数年前に係わった事件が原因で、殉死した同僚たちの魅縛の能力をすっかり受け継ぐことになった。

歌声の他に言霊、舞にも力が宿る。組み合わせれば浮城史上屈指の魅縛師と呼ばれてもおかしくはない実力の主なのだ……あくまで組み合わせればの話だが。

「あなたにわかるものですか！　『下手だけどいい歌だ』とか『下手だけど気持ちだけはこもっている』とか『下手だけど愛嬌がある』なんて慰めにならないこと言われて魔性に懐かれるあの情けない気持ちなんて！」

顔を真っ赤にして叫ぶ少女――リーヴシェランの言葉に、邪羅と呼ばれた青年は盛大に噴き出した。

「そ、それでも魅縛の力は健在なのか……すごく笑える！」

「笑ったら許さないわよ！　だから、あなたは邪魔なんだってば！　どっか行っててよ、帰る時には呼ぶから」

しばらくひとりにしておいて――少女の言葉に青年はしかし頷かない。

「彩糸がいるならともかく、お前をひとりきりでなんて放っておけるわけがないだろ？」

「それこそこんなところに彩糸なんか連れて来られないわよ。最初に一緒に来たとき、寄ってきたたかだか数歳の妖貴があろうことか彩糸を口説きにかかったのよ!?　彩糸がいくら断っても連れ帰る気満々で、彼女が紫紺の瞳見せてあなたのお父さんの名前出すまで引こうとしなかったのよ！」

その言葉に邪羅はぎょっとした顔になる。

「妖貴まで引き寄せたのか！　あっぶねーな」

「だから言ってるんじゃないの、危ないから彩糸は連れて来られないって」

ふたりの姉兄がふたりとも、その美貌で魔性に目をつけられた挙句とんでもないことになったというのに、末っ子である少女には自分にも共通した並外れた美貌に関する自覚が少ない……親しくしていた破妖剣士のように自分のことをみっともないとまでは思っていないようだが、この分では自分も充分『お持ち帰り』の対象になり得ることには気づいていないだろう。

「……ほんと、あぶねー」

青年の呟く声がやや疲れたものだったのは仕方のないことだろう。
「何度もくどいわね」
「尚更目を離すわけにはいかねえじゃねえか……」
ぼそりとつぶやいた邪羅に、リーヴシェランは「あのねえ！」と声を荒らげた。
「だ、か、らっ！　あなたは邪魔なんだって言ってるでしょう!?　あなたの耳は何のためについてるのよっ!?」
「年頃の娘が大口開けて叫ぶなよ。だって、お前おれのこと呼ばないんだろう？」
「はあ？　なに言ってるのよ。帰るときはちゃんと呼ぶって言ったじゃない」
あなたに運んでもらえないと浮城にもどれないんだし――と続けた少女に、邪羅は「違うよ」と否定した。
「なんかあったらおれのこと呼べって言ったとき、お前凄い剣幕で絶対呼ばないって叫んだじゃないか。ひとがせっかく呼ばれたら駆けつけるって言ってやってんのに、なんてひでー女だって思ったからな、はっきり覚えてる。で、今の状況でお前にひとりっきりで琴なんて弾かせてみろ、姉ちゃん並みに問題山積み物件が押し寄せてくるに決まってるじゃねえか。なんかあったらどうすんだ。だけどお前は呼ばないって言うし……じゃあ、そばで目を光らせとくしかないかなー、と」

淡々と告げられる内容に、リーヴシェランの顔が見る間に紅く染まった。
「な、なにを……」
「あー、恥ずかしがってくれんのは嬉しいけど、ごくごく真面目な話だから照れ隠しに怒るのはなしな。正直なとこ、お前には彩糸と一緒に浮城でお籠もりしててもらいたいぐらいなんだからさ」
軽い物言いとは裏腹に、青年の双眸には真摯な光が宿っている。
「……なにか、悪い情報でも入ってきたの？」
青年の常にない態度に、リーヴシェランも声を改めた。
「いや、全然。姉ちゃんの魂の所在に関してもターラから頼まれた芝牙尖って妖貴の正体も、全然まったく感心するぐらい何にも入ってこない。おまけに、一番情報握ってそうなふたりがふたりとも消息不明になっちまってさぁ」
兄ちゃんが消えるのはもう慣れっこになっちまったけど、あのふたりはなあ――。
情報に通じるふたりというのが誰を指すのか、聡い少女にはすぐにわかったらしい。
「紫紺と白焔の妖主が揃って行方不明だということ？」
「そう。兄ちゃんも一年前に姿を消したきりだし、姉ちゃんの親父さんはそれこそ数年前から姿見たやつがいないって話だし……もちろん、それぞれが勝手に出先で遊んでるって線も消え

ちゃいないけど……」

王蜜に柘榴に紫紺に白焔――四人の妖主全員が姿を消した状況は、確かに酷く不安を誘う。

それに、と邪羅が続ける。

「一年前に親父から聞いた第六の君って言うのがさ、今のところ目立った動きはないけど、それが却ってなんだか不気味というか……」

「……嵐の前の静けさ、だと？」

「世界中で魔性は暴れ回ってるし、全然静かじゃないけどな。けど……今暴れ回ってる連中も何かを感じ取ってるのかもしれないな。おれだって、何かしてないと落ち着かない」

我が身をかき抱くように腕を回した青年が、大きく身震いした。

「邪羅？」

「わからないか……？　世界が、ひどくざわめいてる。主持ちの妖貴なら、さすがに自制するだろうが……あんな親父でも一応は魔性たちの重石ぐらいの役目は果たしていたからな、みんないないんじゃ、羽目を外す奴が出てこないか心配だ」

真剣この上ない声に、少女は不安そうに問いかけた。

「今までだって充分、魔性は悪さをしてきたと思うけど……あなたが指す『羽目を外す』って、いったいどんな規模の悪さなの？」

聞きたくないけど気になるから教えてちょうだい。
付け加えられた部分は少女の偽らざる本音だろう。
邪羅が「うーん」と唸った。
「はっきりした線引きがされてるわけじゃないけど、親父によればガエンディアスって砂漠の大国が一夜にして跡形もなく消滅したってのが最たるものだって話。『無理をする』って親父が文句垂れてたからな、そこらへんがぎりぎり上限ってとこじゃないか？」
それに比べればお袋なんてせいぜい街ひとつ燃やすぐらいだもんなー、まだかわいげがあるよな。
続けられた言葉に、少女は嘆息した。
「邪羅、それ全然可愛い被害なんかじゃないから。それにしても、やっぱり聞くんじゃなかったわ。大国が一夜にして消滅って……そんなのが上限と言われたって、全然安心なんかできないじゃない」
「や、だから、さすがにそこまでするのは妖主でなきゃ無理だし。親父たちが結託でもしない限り国ごとなんてことにはならないだろ。まあ、街一つだって人間にとっては大事だろうから、やっぱ慰めになんないか」
「全然なってないわ」

少女の声には力がなかった。

※

ラヴィスの異変はごく小さなことから始まった。

小麦や穀物が傷み始めたのだ。当時雨期であったラヴィスの住民は湿気によるものだと片付け、深く考えることはなかった。

保存用の魚肉の塩漬けや燻製が傷み始めてきたときも、さほど重大なことだとは受け止めなかった。新たに買い込むのは確かに負担とはなったが、それでもラヴィスはそれなりの規模を誇る街であり、新鮮な食料は毎日運び込まれていたからだ。

しかし、いくら買い換えても食材が傷むのは止まらなかった。新鮮な肉が見る間に黴びていくのを目にした者たちは傷んだ食料を一箇所に集め、全部を灼き払った後入念に消毒したがそれでも黴の発生は止まなかった。

そんな最中、街は大きな異変に見舞われた。

外部から突然切り離されてしまったのだ。

誰も街から出ることはできず、誰も街に入ってくることができなくなった——街の境に不可

視の壁が出現し、人々の出入りを阻んだのだ。

ここに至って、ラヴィスの住民たちはこれが魔性による干渉だと気がついた。しかし時すでに遅し――閉ざされた街から外部に助けを求める手段は残されていなかった。

もしも街から出ることができないだけの状況であったなら、事態に外部の者が気づくのはもっと遅れたことだろう……そしてその結果、ラヴィスの状況はさらに悪化したに違いない。

ラヴィスに通いなれた行商の者たちが最初に出入りを阻む不可視の壁の存在に気づいた。わけがわからないまでも、これが尋常の事態であるはずがないと、彼らは隣の町の役所に訴えた。

ラヴィスは地方都市ではあったが、流通の重要な鍵となる街であったため、国の対応は早かった。

調査の者を差し向け、そうして早々に結論を出した。

これは紛れもなく魔性の仕業である、と。

その後の対応も早かった。国王は即座に浮城への依頼を決定し、そのための使者を送ったのである。

そして、浮城はそれを受けた。

選ばれたのは――スラヴィエーラ、オルグァン、マイダード、アーゼンターラの四人。三人

の破妖剣士と道具を用いぬ捕縛術を持つ捕縛師が選ばれたのは、偏に浮城がこの事態を重く見たからに外ならない。

最寄りの転移門から馬で二日の距離を駆けて、彼ら四人がラヴィスに到着したのは依頼を受けてから十日目のことだった。

「うえぇ」

不可視の壁――魔性による結界に触れながら、『刺青のマイダード』の異名を取る捕縛師の青年は実にイヤそうに顔を顰めた。

「性格悪そうな気配がびんびん伝わってくるな……相当な力の持ち主だ。妖鬼でもまた最高位くらいじゃないかな」

嬉しくもない予想を立てられ、スラヴィエーラとオルグァンが息をついた。

彼らの脳裏には、先日の仕事のことが浮かんでいた。目的の魔性めがけて一直線に飛び込んでいく暴走娘ことアーゼンターラにちらりと目をやるのは無理もないことだろう。

スラヴィエーラもまた結界に触れ、自らの護り手に問いかけた。

「確かに頑丈そうだわ。未羽、破れそう？」

問いかけた瞬間、彼女の背後の何もない空間から蜉蝣に似た羽を持つ人外の少女が現れた。

幼さが目立つ妖鬼の少女は、結界に触れることなくじっと見つめ――睨んだと言うほうが正

確かもしれない――やがて忌々しげに呟いた。
「だめ。歯が立たない……悔しいけど、夢晶結や氷結漸でも斬れないと思う。でもまさか、ここで紅蓮姫を出すわけにはいかないし……いくらわたしでも結界破るために命を危険に晒す気にはなれないわ」
もちろんスラヴィのためなら命ぐらい張るけど。
告げられた言葉に、皆一様にため息をついた。
確かに結界を解くだけで食欲魔神の破妖刀に美味しく戴かれるのは未羽でなくとも遠慮したいところだろうと思ったのだ。
しかし、この結界を解かない限りラヴィスに入れないのも事実なのだ。
どうすべきか――スラヴィエーラが腕組みをして考えこむ傍らで、アーゼンターラがおもむろに口を開いた。
「蜜里」
「なに、ターラ？」
今度は黒髪黒瞳の少女が空中から滑り出してくる。
アーゼンターラの護り手は彼女が記憶を取り戻してからというもの、随分気安い口調で話すようになったのだ。

「螺旋杖の予備を持っている？」
「小振りなものなら何本か……使うの？」
蜜里の問いに、アーゼンターラがこくりと頷いた。
「使えるんじゃないかと思うの。結界の質にも因るけど、膜状なら杖の先を鉤針みたいに削れば、引っかけてくるくる巻き取れるだろうし、厚いようなら回しながらねじ込めば穴ぐらいは開けられるから、それを夢晶結に広げて斬ってもらえば結界解けると思うのよ」
答えながら彼女はすでに懐から小刀を取り出している。
そんな彼女の言葉に、マイダードが呆れたような声を上げる。
「ターラちゃん。それ解くって言わないから。絶対向こうに知られちまうし」
はあ、とため息をついたスラヴィエーラは、しかし意外にもアーゼンターラに賛同した。
「ま、この際だわ。紅蓮姫暴走させるよりはよっぽどましな手立てでもあることだし、どうせ向こうにばれるのは時間の問題なんだから気にするだけ無駄だし……ここはターラに頼んじゃおう」
オルグァンもまた頷くが、薄い氷を思わせる瞳にはマイダード同様呆れの色が浮かんでいた。
「……にしても『螺旋杖のトーン』が、こんな乱暴な手を選ぶとは思ってなかったわ。螺旋杖

なんて優雅な響きなのに、使い方がものすごく即物的というか……」
どんな捕縛術だろうって、実は夢見てたのに――。
がっかりしたと言わんばかりのスラヴィエーラの態度に、アーゼンターラはむっと口を引き結んだ。
「ターラはもともと現実的にできてるんです。螺旋杖だって、もともとは水飴を螺旋棒で掬い取るみたいに魔性の命も絡め取れたら楽というきっかけで作ったわけですし」
「み、水飴……」
がっくりとスラヴィエーラが肩を落とす。
どうやら何らかの夢が壊されたらしい。
くつくつ笑いながらマイダードが感心したように言う。
「やー、水飴と魔性の命を同列に考えられるなんて、さすが紅蓮姫に選ばれる人間は感性も突き抜けて非凡だわ」
褒めているのか貶しているのかわからないその言葉に、さすがにアーゼンターラが反論しようと口を開き掛けた時のこと――。
それは、聞こえた。
『まったくね。けど、それは美しくない』

直接脳裏に響いた声に、アーゼンターラが目を瞠った瞬間――。

彼ら四人の前に立ちはだかっていた結界が突然消失した。

「え!?」

驚愕に息を呑む間もなく、四人の体が背後からどん、と突き飛ばされたように結界のあったはずの場所に押しやられる。

あっけなくラヴィスの内部に入ることになった四人は、しかし緊張した面持ちを崩せなかった。

結界は解いたのではなく魔性によって解かれたのだから――自分たちをわざわざ招き入れる真意を考えれば、とても「楽に入れてよかった」と喜ぶことはできなかった。

そんな彼らの脳裏に、またしても声が響いた。

『ようこそ、我が飢餓の街へ』

歓迎するよ――。

告げてくる声は残酷な愉悦の響きに満ちていた――。

2

ラヴィスの街は不気味な静けさと緊張に満ちていた。
魔性に招じ入れられた格好の四人は、それでも立ち止まってはおられず移動し始めたわけだが、周囲から向けられる視線と感情に完全には平静ではいられなかった。
なんと言うべきか――ひどく落ち着かない気分にさせられるものだったのだ。
「この気配が妖鬼だったら、何度か経験してるから気にはならないんだけどね」
ぽろりと零れたスラヴィエーラの言葉に、オルグァンとマイダードが乾いた笑いを洩らした――同感だと口にするのも空しい気分らしい。
「……ま、自分がひとさまに美味そうな骨付き肉に見られる日が来るとは思わなかったよな。妖鬼に『喰わせろ』と言われたことはあるけどな」
「わたしも、妖鬼になら『美味そうだ』と言われたことあるわ」
あれはあれで鳥肌立ったものだけれど――。

「……同じ人間にそういう目を向けられるというのは、想像を絶する……気色悪さだわね」
「別におれたちそのものを見て美味そうだと考えてるわけじゃなさそうだが？　先ほどから向けられてるのは革のベルトや靴や……あとは、中身の見えない袋あたりだな。食料でも詰まっていると期待してるんだろう」
どれだけ飢えてるかがわかるというものだ。
淡々とした口調で告げるオルグァンに、スラヴィエーラが「やめて」と頭を抱えた。
「救うために来た街で、その住民に身ぐるみ剝がれるのは勘弁ってものだわ」
「だから、手間がかかるのを承知で四人一緒に動いてるわけでしょー？　ばらばらに分かれたらその瞬間にでも追いはぎに変わる気満々でおれたちのこと見てるわけだし……街のヒトタチってば」
マイダードの茶化した言葉すら、この重すぎる空気の中では笑いを誘ってはくれない。
「でも、建物の配置が地図と全然違うわ」
事前に提供されたラヴィスの地図は完全に頭に入れたのだが、今歩いている街は明らかに地図とは異なる建物の配置を見せている。
指摘したアーゼンターラに、「……変えたんだろうな」とオルグァンが応じた。
変えた――誰が？

決まっている。
ラヴィスを飢餓の街に変え、支配下に置いた魔性が、だ。
口で言うのは容易いが、実際にそれを為すのは簡単なことではない。並の妖鬼にできることではない。最高位クラスの妖鬼であっても、自分たちが移動するのに対応して街並みを変えるには相当な労力が必要となるはずだ。
しかも、相手は自ら自分たちを街に招き入れたのだ——無理矢理侵入され、その足止めのために必死に力を尽くしているというわけではない。
その意味するところは。
「遊んでやがるな」
マイダードが洩らしたつぶやきに収束される。
そして、もうひとつ——重大な事実が明らかにされる。
遊びでそんなことができるほどの力を、ラヴィスを襲った魔性は持っているということだ。
相手は——恐らく妖鬼では、ない。
どくり、と心臓が跳ね上がるのを、アーゼンターラは覚えた。
この街を襲ったのは妖貴なのだろうか!?
恐ろしい可能性を思いついたのと——マイダードが深いため息をついたのは同時だった。

「……お約束にもほどがある」

街一番の大通りを進んでいたはずだというのに、彼らの目前には巨大な壁が立ち塞がっていた。

そうして、振り返った先にいるのは――。

強烈な飢餓に支配されたラヴィスの住人たちが、『食べ物』を見る目で自分たちを見つめていた。

※

「ベルトは革だ」

煮て食える。

「靴も革だ……長靴のやつもいるぞ」

いっぱい食える。

「あの大男は革の胴衣を着てるぞ」

どれだけの日数もつだろう？

ぎらぎらと異常なまでに目を輝かせて四人を見つめる街の住人たちを支配するのはひたすら

に飢えだ。
　彼らの目には、自分たちは同じ人間に見えていないに違いない。餌を運んで来た何かぐらいにしか認識されていないだろう。
「犬も猫も食い尽くした……」
「鼠も捕り尽くした――」
「小鳥は骨までしゃぶり尽くした」
「木の根も皮ももう残ってない……」
　ぞっとするような感情のこもらぬ声で、街の住人たちが話しかけてくる。
　いや、自らに言い聞かせているだけなのか。
　しかし、そうではないことは次の言葉ではっきりした。
「なあ、可哀相だろう、おれたちは？」
　自嘲交じりの声には強い阿りが宿っている。
「哀れだろう？　あんたたちは持ってるんだろう？　少しぐらいおこぼれをくれたって罰は当たらないと思わないか？」
「恵みをくれよ」
「そのベルトを――」

「靴を」
「胴衣を……」
「荷物を」
ぎらぎらと異様に血走った目で、住人たちが近づいてくる。
「「おれたちに寄越せ――！」」
その声を合図に、住人たちは一斉に四人に飛びかかって来た。

※

「まったく冗談じゃないわよ！　なんで助けに来た相手に襲われなくっちゃいけないわけ!?　間違ってるでしょ、絶対にこれ間違いだから！」
鞘に収まった夢晶結を振り回しながらスラヴィエーラが叫んだ。
ガツ、ゴツと鈍い音を放つのは夢晶結の鞘だ。襲ってくる人間の顔やら肩やら背中やらに叩きつけられているのだ。
「間違ってたってなんだって、襲われてるのは現実なんだから逃避はやめようね……って、してないか。しっかり急所外してぶったたいてるなー」

「妖鬼相手と違い、力加減が難しいな。思い切りやると骨ごと潰してしまいそうだ」

淡々とした口調でかなり物騒なことを呟くのはオルグァンだ。

それぞれ街の住人相手に悪戦苦闘中である。敵ではないだけに、思い切り力を揮うわけにはいかないのが最大の難点だ。助けに来た相手を殺してしまったとあっては本末転倒というもの、しかし飢えに我を忘れた者たちは容易く倒れてはくれない。

アーゼンターラもまた、鞘をつけたままの紅蓮姫で周囲の者たちに応戦していた。魔性相手にはいやというほど力を発揮する破妖刀は、しかし人間相手だとぴくりとも反応しないものだから、ある意味扱いは楽と言える。

「蜜里！　彼らを強引に眠らせるとかできない!?　あなた歌は得意だったでしょう!?　子守歌とか歌って気持ちよく眠ってもらう、とか――」

「無茶言わないでよ、ターラ！　子守歌とかはある程度気分が落ち着いててこそ効き目があるのよ。こんな興奮状態の人間相手に効くわけがないでしょ！　第一……黒幕が黙ってないわ。今だってわたしたちの力を押さえつけに来てる。未羽と左谷芭が出て来れないのはそういうわけよ！」

言われてみるまで気づかなかったが、確かにこの街に入って以来スラヴィエーラとオルグァンの護り手が姿を現さない。

呼ばないから現れないのかと思ったが、こんな状況で護るべき相手を放っておくなど確かに護り手のやることではない。

「じゃあ、多少強引でもいいから、何とかできない!?」

「たとえば？」

「強風起こして壁に叩きつけて眠ってもらう、とか……」

それ、眠らせるんじゃなく昏倒させるって言うから——汗に塗れて乱闘中のマイダードが、しかし暢気な突っ込みをいれてくる。

いかなる場面においても余裕を失わないというのは、彼の美点かもしれない。その余裕が他人の揚げ足取りに限られていなければ手放しで褒めてもいいのだが。

蜜里が呆れたように答える。

「馬鹿言わないで。こんな状態で力なんか放ったら、加減が効かなくてただのお肉にしちゃうに決まってるじゃない！」

甲高い少女の声は乱闘の中でもよく響いた。

「……お肉」

スラヴィエーラの実にイヤそうな声が聞こえて来た。

「それよりターラ！　封じてるからって、あんまり紅蓮姫を振り回さないで！　万が一鞘から

抜けたら、一番近くにいるわたしが餌扱いされるんだから！」
「だけど、武器になるのはこれしかないのよ！　わたしに素手で戦えって言うの!?」
飛びかかってくる相手の向こう脛を思い切り払いながらアーゼンターラが叫ぶ。
ごき、と鈍い音がした——骨が折れたかもしれない。しかし構ってはいられない。こうなっては相手の動きを封じるぐらいしか手はないのだ。
その時だ。
『無駄だよ』
嘲るように哀れむように、声が降って来た。
街に入る前、入った時に聞こえて来たあの声だ。
まだ若い——青年のそれに、蜜里が不快げに顔を顰めた。
『そいつらは倒れない。足を折っても腕を折っても、そんなことは気にならないほど飢えきっているからね。あんまり焦らさないほうがいいよ……でないと、彼らの最後の理性がはじけ飛ぶかもしれないし』
ご馳走してあげてよ——。
考えるもおぞましい可能性を指摘する声には、抑えられぬ優越感がにじみ出ていた。
「……趣味よくねえな」

「まあ、魔性の遊びなんて趣味がよかった試しがないけど」
マイダードとスラヴィエーラの毒づきに、妖貴である少女が心外とばかりに反論した。
「一緒にしないでちょうだい！　少なくともわたしにはこんなえげつない趣味はないわ！　わたしはもっと、もっとねえ……っっ！」
こんな場所にも係わらず、己の趣味の良さを訴えようとした蜜里は、しかしはっと息を呑んだ。
「あ……」
「蜜里？」
幼い少女の妖貴の胸元が淡い光を放っていた。
「これ……」
蜜里は宙に浮いたまま、懐から光る何かを取り出す。
遠目でよく見えなかったが、それは小さな丸い石のようだった。それが、金色の淡い光を放っている——いや。
すでに淡くはない。徐々にその輝きは増していく。
「蜜里、それはなに!?」
「何って……なに、どうして、こんなの聞いてない……！　こんな力があるだなんて、わたし

聞いてないのにっ！」
蜜里の手の中――黄金の光が、弾ける！
その刹那、ラヴィスは黄金の光に包まれた――。

※

それは圧倒的な力。
それはこの上ない慈しみ。
それは優しい慰撫。
金の光が力と慈しみと慰撫を放ちながらラヴィスの街に降り注ぐ。
その光の粒に触れた途端、飢えに血走った住人たちの瞳に理性とも正気とも呼ぶべき光が戻り、そうして瞼が閉ざされていく。
ひとり、またひとりと住人たちの体が頽れていくのを、四人は呆然として見ていた。
最後のひとりが瞼を閉ざした時、思わず洩れたのは安堵の息だった。
「蜜里」
未だ宙に留まっている護り手の少女をアーゼンターラは呼んだ。

「え、あ、ああ、うん」

呆然とする思いは蜜里も同じらしい——意味をなさない声を洩らしたあと、ようやくアーゼンターラの傍らに下りてきた。

その手に握られているのは真球の石だ。琥珀ほどに飴色が強くない。黄玉だろうか。

「もう光ってないわね」

いつの間にか近づいていたスラヴィエーラが観察するような目で呟いた。

「見せてもらってもいい？」

言いながらすでに指をのばすのに、蜜里が慌てたように身を捩った。

「蜜里？」

「だ、駄目、触っては。これは強い魔具だから、人間が触れたら何が起きるかわからないの。だから触らせられない」

魔具という聞き慣れない言葉に反応したのはマイダードだった。

「封魔具ならぬ魔具かよ。初めて見るな。酔狂な魔性もいたもんだ」

「マイダード？　魔具ってなに？　知ってるんならもったいぶらずに教えてちょうだい」

スラヴィエーラが指をわきわきさせながら尋ねると、刺青の青年は思わずといった様子で半歩身を引いた。

「誰ももったいぶってなんかいないだろ！　初っぱなから脅してかかるのはやめろって！　魔具ってのは魔性特製の道具の総称だよ。魔力を増幅させるものとか力そのものを封じ込めてあるやつとかなら噂には聞いたことあるが、これは……何の目的で作られたもんなんだろうな。そこまではわからないよ」

「魔性が作るって……まさか、蜜里が作った……わけじゃないわよね」

こんなの聞いてないって叫んでたし。

記憶を辿りながらそう告げるアーゼンターラに、蜜里がこくこくと頷いた。

「こんなもの、いったいどこで手に入れたのよ？　いえ、おかげで助かったけど……何が起こるかわからないのじゃ、危険じゃないの」

できれば利用はやめて欲しいという願いをこめての彼女の言葉に、蜜里がぎゅっ、と石を握りしめた。

「危険なんかじゃないわ！　ほんとに、これまでわたしの力を増幅してくれるだけだったんだから！　これのおかげで魔性の心臓の位置もわかるし、ターラだって助けられてきたんだからね！　危険物扱いしないで！」

そうだったのかとアーゼンターラは得心が行った。

一年前、紅蓮姫を与えられて以来、蜜里の援護がより的確になったことには気づいていたの

だ。その最たるものが妖鬼の心臓の正確な位置を彼女が教えてくれるようになったことで——てっきり自分が本来の記憶を取り戻したおかげで絆が強まり、その恩恵で蜜里の『視力』が上がったのだろうと勝手に思っていたのだが、どうやらそれは魔具のおかげだったらしい。

「わかったわ、誤解して悪かった。でも、本当にどうやって手に入れたの？　蜜里は生まれてすぐにあたしと一緒に来たから、魔性の知り合いなんていないと思ってたんだけど……それとも護り手の誰かが持っていた、とか……？」

それはないだろうな、と思いながら問いかけると、蜜里はぽつりと答えた。

「アーヴィヌスからもらったの。秘蔵の魔具だって。妖鬼じゃ手に余るだろうけど、わたしなら大丈夫だろうって……」

使えそうなひとは他にもいるけど、それこそ危なくて渡す気になれないって言ってた。

蜜里の言葉に、アーゼンターラの脳裏に砂色の髪の捕縛師の護り手とか、ブロンズの髪の青年の押しかけ護り手とか、金髪巻き毛の美少女の護り手とか腐れ縁の白い青年とかの顔が浮かんだ。

アーヴィヌスの懸念は確かにもっともだと思わざるを得ない。

しかし、ほかの三人は違う感想を抱いたらしい。

「秘蔵の魔具ねえ……確かにあったとしてもおかしくはないけど」

「こっそりお嬢ちゃんに渡したってあたりが、なあ」
「城長が何を考えているのかはわからないが……確かにおかげで助かったんだ。ここは一応感謝しておくべきだろうな」
なにやら歯切れの悪い言葉を口にしてくれる。
が、問題の魔具に拘っていられたのはそこまでだった。
どこから現れたのか——五体もの妖鬼が、意識を失った街の住人に向かって近づこうとしていたのだ！
「話はあとね！　行くよ、未羽！　せっかく助かったのに妖鬼たちの胃袋に送り込むわけにはいかないわ！」
夢晶結を鞘から引き抜き、スラヴィエーラが一気に駆け出す。
「確かに寝覚めが悪いな。左谷芭、行くぞ」
オルグァンも氷結漸を手に別の妖鬼に向かっていく。
「ただ、このままだと無尽蔵に妖鬼出されかねないってのがいただけない。だもんで悪いけど、ターラとお嬢ちゃんは元凶をさくっと斃して来てくれないかな？　どうせ妖鬼相手じゃ紅蓮姫も張り切ってはくれないんだし」
頼むよ——と言い置いて、マイダードがまた別の妖鬼に近づいていく。

確かにマイダードの言う通りだ。

さくっと片付けられるような相手かどうかは別として、向かうべきは自分だろう。紅蓮姫の柄を握りしめ、アーゼンターラはき、と顔を上げた。

「蜜里」

黒髪黒瞳の少女は心得たように頷いた。

「あっちよ」

その指の指し示す方向へ、彼女は駆け出す。

妖貴であろうとも、臆してはいられない。紫の双眸に覚悟をたたえ、アーゼンターラはただ前を見据えて駆けた——。

3

ラヴィスの中心に高く聳える時計塔――。
街中の建物の配置が変わっていた中で、それだけが地図の位置から動いていなかった。だからそこだとアーゼンターラは確信した。
中心にある高みから、飢えに苦しむ人々の姿を眺め、悦に入っていたのだろう――そう思うと吐き気に似た嫌悪を覚える。
「ターラ」
螺旋階段を駆け上る。
一段ごとに妖気が強くなる。
やはり、これは妖鬼が持つようなものではない。
「気をつけて。これは、違うわ」
「わかってる」

ぎゅ、と唇を噛みしめて、アーゼンターラは紅蓮姫の柄を握る手に力をこめた。

下ではスラヴィエーラたちが意識のない住人たちを守るために戦っている。五体もの妖鬼が相手だ。かなうことなら早く片付け援護したい。

だが――。

「妖貴ともなれば、簡単にはいかないんでしょうね――」

どくり、どくりと心臓がうるさいのは、きっと走っているせいばかりではない。

けれど、相手が何者であれ戦い勝利しなければ未来はない。望むそれも現実的には明日の朝日を目にするそれも。

「でも、倒すわ」

弟を連れ去ったのも妖貴だった。

彼を取り戻すためには妖貴に怯まず対等に戦えるだけの力が必要となる――いつかは通らなければならない道だった。それが今日になったとして、何の不都合があるだろう。

力を貸して、紅蓮姫。

声なく破妖刀に語りかけながら、アーゼンターラは最上階の扉を開いた。

漆黒の広大な空間が目の前に広がっていた。現実の時計塔の最上階より遙かに広い――異界に繋げられているのだ。

その壁面に当たる空間に、ずらりと並ぶのは無数の鏡だ。その中には街中の様子が映し出されている。

ひもじいと泣きわめく子供。血走った目でイナゴを追いかける男。隠し持っていた乾パンをひとりでかりかりと齧る老女。

目を背けたくなるような光景が全面で繰り広げられている。

「なんてことなの――」

扉を開けたところで立ち尽くし、アーゼンターラは呟いた。

映し出されているのは、皆悲惨なものばかりだ。それを……この事態を招いた魔性は楽しみながら観ていたとしか思えない。

趣味が悪いなどという次元の話ではないと思った。

「やあ、来たね。そんなところで立ってないで、早く入っておいでよ、可愛い浮城の破妖剣士さん？」

声をかけられ、アーゼンターラはようやくその空間の闇の中に、闇以外の者が存在していることに気づいた。

いるはずだとは思っていたが、あまりにも惨いありさまにそのことを迂闊にも失念していたのだ。

しかし、彼女がすぐにその存在に気づけなかったのも無理はない。
その青年は、完全に闇に同化していたのだから。
漆黒の髪と瞳――すらりとした肢体は人間とは違う美に溢れている。
圧倒的な力そのものだとわかる美貌。闇の化身。
妖貴だ。
別に目にしたのは初めてではない。最初に出逢った時、アーゼンターラは無力な十二の娘で絶望以外感じられなかった。
二度目に会った時はすでに浮城に籍を置く捕縛師だったが、衝撃的な弟との再会で正直よく覚えていない。
三度目だ。
あの頃とは何もかもが違う。自分は最強の破妖刀を手にし、倒すためにここに来た。待っているのが妖貴だと、半ば以上確信した上でここに来ることを選んだ。
覚悟はとうに決めていた。
だのに――にも拘わらず、その強烈な存在感に圧倒される。
これが妖貴なのか。蜜里も敵として見えれば、こんな風に恐ろしく感じられるのだろうか。
こんなものを……本当に人間が倒せるものだろうか。

萎縮しそうになる。本能的な恐れが全身を縛りつけそうになる。こんなことではいけないのに――わかってはいても、震えそうになる体を制御できない。

そんなアーゼンターラの左手に触れる温もりがあった。

「ターラ」

心配そうに呼びかけてくる幼い声。

蜜里の存在に、アーゼンターラはようやく息をついた。そうして気づく――この圧倒的且つ悪趣味な空間を満たす空気に自分はどうやら当てられたのだ、と。

少し落ち着いてみれば、相手は闇の化身と呼べるほどのものではない。弟とともに現れた芝牙尖はもっと深く艶めいた闇を纏っていた。底知れぬ深い闇はアーゼンターラに本能的な恐れを抱かせたものだ。

引き比べて目の前の妖貴には、それだけの闇は感じられない。

落ち着け、落ち着け、落ち着け――と、彼女は自分に言い聞かせた。

最初から呑まれてどうするのだ。それでは敗北しか待ってはいないではないか。勝つという意志と覚悟を忘れて、どうして人間に過ぎぬ自分に万が一にでも勝機が訪れよう。

まずは冷静になること。そうして恐れ以外の感情を総動員して、相手を冷静に観察すること――戦いが前提である以上、それは長くは許されないだろうが、それでも全くないわけではな

い。

見つめ、そうして何事であれ見つけるのだ。

アーゼンターラがひたと相手の妖貴を見つめると、漆黒の青年が可笑しそうに喉を鳴らした。取るに足らない存在だと見なされているのがわかる。だが苛立ちは起こらない。そう、確かに未だ自分は妖貴に脅威を与える存在であることを示していない。

……示すのはこれからだ。どうしても示さなければならない。

そのためにあらゆる努力を惜しまず尽くさなければならない。

そんなアーゼンターラの覚悟のほどに相手が気づいたかどうかはわからない。妖貴である青年は笑みを浮かべたまま再度彼女に声をかけて来た。

「突っ立ってないで入っておいでよ。せっかく、貧乏くじを引いた君のためにわたしが時間を割いてあげようと言うのだから」

傲慢な物言いは魔性の常だが、妖貴ともなるとそこに現実的な圧迫感を伴う。

思わず従いそうになる心を押しとどめ、アーゼンターラは相手を見つめ続けた。

妖貴の青年がふ、と息をついた。

「頑固だね。でも、そのままじゃあ、いつまでたっても話は進まないよ。君たちは無駄足を踏んだ挙句、君は一番の貧乏くじを引く羽目になってしまった。そのあたりのことぐらいは聞い

ておきたいんじゃないのかな？」
死出の土産に――言外の含みはあからさますぎた。
だが、それ以上にアーゼンターラの関心を引いたのは妖貴の言葉だ。
「無駄足……？」
引っかかりを覚えて思わず問い返すと、妖貴が嬉しそうに頷いた。
「そう、君たちはラヴィスに来る必要はなかったんだ。なぜならわたしは、ある程度の時間が経過した時点でこの街を解放するつもりだったんだからね」
意外すぎる言葉に、アーゼンターラは目を瞠った。
しかし目に飛び込んできた青年の笑顔に、ぞくりとするものを感じ、身を引き締めた。
「ある程度の時間、とはどういう基準なのかしら？」
幸いなことに声は震えずにすんだ。
しかし妖貴は突然別の話題を振ってきた。
「ところで君は、人間はどれぐらい追い詰められれば禁忌を犯すと思うかい？」
話が繋がらない――脈絡のない言葉にアーゼンターラは無言で相手を見つめた。
「漠然としすぎて答えられないかな？　じゃあ、言い方を変えよう。人間というものは、どこまで苦しめば最愛の存在の為に罪に堕ちると思う？　最愛の者を手にかけるには、それ以上の

責め苦が必要だと思う？」

青年は純粋に興味があるのだと言いたげに問いかける。

相変わらず話は繋がらない。だが、青年の口から洩れる内容は人間にとっては知りたくもない部類に属するものだ。

「そんな悪趣味なこと……知る必要があるとは思えないわ」

「必要の有無は君の決めることではない」

ぴしゃりと言いきる青年の漆黒の双眸に、ちらりと不快げな光が過った。

「しかし君も同じことを言うんだね。君たち人間はわたしの知的好奇心に対して実に非協力的だ。だから、わたしは自分で確かめるしかなくなったんだ」

淡々とした口調には何の感情も宿ってはいない。

なのに——なぜか、その言葉を耳にした瞬間、アーゼンターラは背中がびっしょりと濡れるような錯覚に見舞われた。

「確かめる……」

知らずに洩らした声に、妖貴の青年が静かに頷いた。

「この街はわたしが選んだ実験場だよ。全住民の情報はひとつも洩らさず頭に入っている。遠からず浮城からひとが来るのはわかっていたからね、迅速且つ正確な結果を引き出すために住

人全員の飢餓を増幅はしたが、手を加えたのはそれだけだ」

何でもないことのように――否、嬉しそうに瞳を輝かせながら妖貴の青年は『実験の途中経過』を滔々と語り始める。

「二区に住むイルオン・ライスという男が隣地区の飼い犬を盗んで食べたのが実験開始五日目だったな。それを皮切りに皆余所の飼い犬や飼い猫に手を出し始めた……二日ほどで街から犬も猫も消えたがね。最初に鼠を口にしたのは下町に住む十二歳の少女――マルヤ・シロカエ。実に生命力旺盛な娘だと感心したよ。それに比べ、領主の娘はいただけないね。街中が飢えに苦しんでいるのに自分の食事が当たり前に用意されていることに何の疑問も抱かないのだからね。それが自宅で飼っていた観賞用の鳥だと知るまでは美味しそうに口にしていたのに、知った途端にものが食べられなくなった。これは繊細というべきか……いや、やはり生命力が弱いと見なすべきだろうね」

聞くに堪えない経過報告は延々と続いた。

嫌悪感に顔を歪めるアーゼンターラに、青年は哀れむような目を向けた――自分が得た素晴らしい情報の価値も理解できない無能だとでも言いたいのか。

「五区三丁目のクライン・アズが隣家の娘を見て喉を鳴らしたのが昨日のことだ。今朝からはずっと目で追っていた……本当に、もう少しのところだったのに、君たちが来てしまった。そ

れでも君たちがきっかけになってくれたらと思って招き入れてやったのに……残念だ。実に残念だよ」

嘆かわしげに肩を竦める青年の言葉に、アーゼンターラは顔から血の気が引くのを感じた。

まさか——まさかこの魔性が狙っていたのは。

「人間に人間を……食べさせるために、まさかそんなことのために……？」

「違うよ」

やはりわからないのかと、青年がち、ちと舌打ちする。

「そんなものは途中経過に過ぎない。わたしが知りたかったのは、人間が共食いするまで追い詰められたあとの精神状態だよ。彼らは飢えに耐えきれず、同種である他者を食料と見なす。最初に手を出すのはやはり馴染みのない他人だろうね。しかし、考えることは皆同じだ。やがては知り合いしか食べるべきものがなくなる。食を断って死を選ぶ者も出てくるだろう。それは全体のどのくらいの割合か、実に興味深く思っているよ。さらにわたしが知りたいのは、絶望の中で知人や家族を手にかけた人間が、突然解放されたときの反応だ。言っただろう、ある程度のところでわたしは街を解放するつもりだったと」

吐き気がした。

「魔性のせいで街の食料は全て腐って食べるものは限られた。さて、その後の食事は全て彼ら

が選んだものだ。助けが来るかもしれないという一縷の望みに縋り、生き残るために仕方ないのだと自分に言い聞かせて普通なら口にしないものを食べ、ついには共食いという禁忌を犯す……さて、晴れて助かった時、彼らは自分の行いをどう受け止めるんだろう。実に興味深いと思わないかい？」

「思うわけがないでしょう」

アーゼンターラの声が硬く凍る。

「無粋だな。しかも君たちの……あの光のせいで住人たちは飛ばしかけていた理性を取り戻してしまった。台無しだ。わたしの大切な実験を、君たちは滅茶苦茶にしたんだ……実に、実に許し難いね」

青年の双眸に危険な光が浮かぶ。

アーゼンターラも同時に叫んでいた。

「蜜里！」

「ええ、ターラ。すでに結界は敷き終えた……『彼』が出てくるための条件は整ったわ」

「ありがとう」

短く告げて目を瞑る。

意識を沈める——深く、深く。

奥底まで沈めれば、そこに『彼』がいる。『彼』に代わり、委ねる。
紅蓮姫を――最強の破妖刀を、『彼』の恋人を。
自分には無理でも『彼』の言うことになら、紅蓮姫は従うからだ。
アーゼンターラの意識の奥底から浮上するのはラキスの意識――それだけでアーゼンターラは破妖剣士になる。
「紅蓮姫」
ラキスが優しく囁きかける。
「愛しいわたしの暁の姫。さあ、ともに魔性を滅ぼそう――」
睦言にも似た彼の言葉に、鞘から引き抜かれた真紅の刀身が一際強い輝きを放った――。

第十五章　覚悟

1

虚空の中にぽつんと浮かぶ真球の空間——。
水とも闇ともつかぬもので満たされたそこに揺蕩うように小さな城が在った。
それは第六の妖主——今はまだ雛から脱しきれない少女の居城だった。
その城の一室にて、白焔の妖主白煉は不機嫌な面持ちで長椅子にもたれかかっていた。
自ら切り落とした右腕はすでに再生している——肘の部分に宿る命は失われたままだが、その程度のことで彼女の力も美も損なわれることはない。
ならばなぜ、彼女の美貌は不機嫌に曇っているのか。理由は室内に存在するふたりの男にあった。
「白煉、その姿も魅惑的だができれば右腕は上にしたほうがいい。繋がったとはいえ、まだ痛みがなくなったわけではないのだろう？　時折辛そうにしているのに気づかないわたしではないよ」

そう声をかけながら、広い肩掛けを手に彼女に近づくのは紫紺の妖主藍絲である。

白煉が『雛』の少女に膝を折って以来、先に服従の意を示していたふたりの男は白煉のそばから離れない。

正確に言うなら、傍でつきっきりで世話を焼こうと離れないのが藍絲で、もうひとりの不届き者は、それを鬱陶しがり邪険に振る舞う白煉の様子を娯楽に見立て楽しむために近くにいるのだ。

この時も――。

「うるさい、黙れ。妾より先に負けた男などに心配されても嬉しくも何ともない」

けんもほろろな白煉の言葉にしかし全くへこたれる様子のない藍絲というふたりのやりとりを、にやにやと笑いながら見守っていた。

白煉の機嫌が上向こうはずがない。

さすがに主と認めた相手の城を焔で損なうわけにはいかないと自制はしているが、このままでは早晩限界を超えそうだった。

じろりと深紅の青年を睨みつけると、白煉はふん、と鼻を鳴らした。少しばかりの意趣返しは許されて然るべきだろう――勝手に決めて彼女は八つ当たりを兼ねて口撃を仕掛けた。

「我が息子も、まさかお主があの娘を放り出してこんな所にいるとは思いもすまいな。自分の

命を切り捨ててでも傍にいることを選んだくせに、薄情なことだ」

柘榴の妖主が王蜜の妖主の娘のために自らの命数のほとんどを投げ捨てたのはほんの数年前のことだ。

それほどの執着を示しながら、その相手のそばを離れて『雛』たる少女の居城にいることを白煉は痛烈に皮肉った——どう考えても、男が執心する娘とこの城の主が共存する未来は望めないからこそだ。

しかし厚顔無恥を絵に描いたような男は平然としたものだった。

「今のあれはただの抜け殻だ。そんなものにつきっきりでいる必要はないだろう？　幸い浮城のやつらが大事に守ってくれていることだし、しばらくは放っておくさ」

確かに魂が抜けた肉体は抜け殻としか呼びようのないものだ。

心身ともに揃ってこそ、執着する意味があると言いたいのか——だが、それではいったいいつまで『放っておく』つもりなのか。

知りたいとは思ったが、訊いたところで素直に答えるような相手でもない。

長椅子にもたれたまま、白煉は相手のひとつしかない正真の深紅の瞳をひたと見据えた。

「率先して取り戻すつもりはないということか？」

これには青年はすぐには答えなかった。

だが、それは答えることを迷ったのではなく、本人がそのことを深く考えていないことに初めて気がついたとでもいうような微妙な間で、見て取った白煉は正直呆れた。

「まあ、いずれは、な。時が来たら必ず取り戻すさ。それまでは……そうだな、あいつのらしくもない親心ってやつを尊重してやろうか、とな」

今考えついたことだろうに、よくも言うものだ。

「考えているように見せかけて、実は何も考えておらぬだろう、お主。お主のそういうところが妾は嫌いなのだ。そのくせ時々深謀遠慮を働かせる……どちらであるのか全く読み取れぬ。おかげでどれだけ肩すかしを喰らい、辛酸を嘗めさせられたことか。此度のことにしても、よくもまあ、戦いもせずに膝を屈したものだ」

苦い思いを隠す気にもなれず、白煉は愚痴めいた言葉を相手に投げつけた。

何を考えているのか、それとも何も考えていないのか——柘榴の妖主の最もつきあいにくいところはその判断の難しさにある。

気まぐれで奔放なこの男の選択や行動に、過去どれだけ悩まされて来たかしれない——今度の選択がどちらであるのか。万華鏡のようにくらくらと変わる男を読み解くのは至難の業であり、白煉はとうにその努力を放棄していた。

それでも、今回ばかりは放っておくわけにもいかない。そうするには『雛』たる少女の存在

は世界にとって大きすぎる。

そんな彼女の思いを汲み取れぬほど鈍感な男でもないだろうに、柘榴の妖主は相も変わらず人を食った態度を崩さないままにやりと笑んだ。

「なんだ。おれらしいと言ったそうなのに、そんなことが不思議か？」

不思議などではない。

それは正直なところだったから、白煉は率直に答えた。

「不思議ではないとも。実に物臭で無駄が嫌いなお前らしいことだと思ったとも」

だが、この男は状況次第ではいくらでも無駄な行為を繰り返すのも確かな事実だ。

「……命が惜しいとは、また笑わせてくれることだ」

これに深紅の青年は意外にも反応した。

「惜しいさ。決まってる……残る命数は指で数えられる程度だ。無駄に費やしていいわけがない。散らすにしても費やすにしても熟考が必要だ」

つまりは――『雛』たる少女と対峙して命数を減らす愚を避けたということだろうか。

あの未成熟な少女の中に、彼はそれだけの力を見いだし、だからこそ戦わぬことを選択したというのか――。

だとしたら、彼の眼力は確実に自分より上であると言える。

自分は戦うまで、他の妖主の力を掠め盗っただけの……借り物の力であることにも気づかずそれを誇らしげに披露する『道化鴉』と見なしていたのだから。

しかし、そのことを認めるのは少々でなく癪に障る。

ついでに忠告も兼ねて一刺ししておくことにする。

「しかし雛の方も愚かではない。お主の二心などとうに見抜いておられることだろうよ」

そう告げた瞬間の深紅の青年の顔を見たとき、白煉はらしくもない親切心など起こすのではなかったと心底後悔した。

彼はにやりと不敵な笑みを浮かべると、

「それぐらい見抜いてくれないと、逆にこちらが真贋を疑いたくなるというものさ」

と、平然と言い放ったのだ。

わかってやっているのだ、この男は。

では、この先に繋がる縹眇たる未来もこの男の目にははっきりと見えているのだろうか――。

恐れとも羨望ともつかぬ思いが胸に湧き上がったその時、それまで沈黙を守ってきたもうひとりの男が口を挟んできた。

「しかし、育てておられる『雛』のほうは、到底本物とは呼べぬ代物だな」

さりげなく話題を変えたのは、あるいは自分を思いやってのことだろうか。
だとしたら癇に障ることだ。
しかし、新たな話題は彼女にとっても気になるものであったため、黙って流れに耳を傾けることにした。
深紅の青年は、さして興味もない様子で——当然だ、この男が顔色を変えるほどの執着を示すのは朱金の炎を纏う娘以外にはあり得ないのだから——軽く肩を竦めた。
「さてね。白煉の言葉を借りるなら、借り物の羽で装う道化鴉で終わるか、鋭い嘴を持つ猛禽に化けるか……全ては雛鳥の覚悟次第というものだろうよ」
その、刹那——。
ひとつの気配が彼ら全員の意識の琴線に触れた。
「おやおや」
藍絲が微苦笑を浮かべて呟いた。
「緋の片翼が飛び立つとは……何かあったかな？」
意味深長な眼差しを深紅の青年に向けながらの言葉に、しかし相手は応じなかった。
「さてな」
その声はどこまでも無関心に冷めていた——。

※

おかしい、と意識の奥底でアーゼンターラは思った。
ラキスに紅蓮姫を委ねた。いつもであれば安心していられるのに、今日はなんだか落ち着かない。
意識が浮上しそうになる。
駄目よ、駄目。
アーゼンターラは必死に自らをその場に繋ぎ止めようとした。ラキスでなければ紅蓮姫を制御できない。ラキスでなければ紅蓮姫の力を引き出すことはできない。ならば自分の意識は出さないほうが良い。
そう思うのに、何かが外側から訴えかけてくる。
――ご馳走！　なんて久しぶり……食べてもいいご馳走だわ！
聞こえてくる少女の声――これは誰のものだろう？
『やめなさい、紅蓮姫！　闇雲に襲いかかっても彼の命は啜れない！』
どこかで聞いたことのある声も……少女のものだ。

『なんて滑稽な！　御せもせぬ破妖刀を手にここまで来るとはね。浮城は随分人手不足らしいな』

これはわかる――ラヴィスを襲った妖貴の声だ。

『ターラ！　紅蓮姫を抑えてっ！　これではいくら心臓の位置を教えても意味がないわ！』

ラキス相手にもあくまで「ターラ」と呼ぶのは蜜里だ。

聞こえてくる声とその内容に、アーゼンターラの意識は困惑した。

御せもせぬ破妖刀――？

ラキスが手にしているというのに、紅蓮姫が制御できないというのだろうか？

そんな馬鹿なことがあるはずがない。

彼以外に今現在紅蓮姫を手にできる人間は存在しない――なのに、彼に扱えないだなんて、そんなことが……？

『紅蓮姫、暴れないでくれ！』

『隙だらけだな。ほら、わたしから注意を逸らしていいのかい？　ああ、破妖刀が暴れてそれどころではないか。仕方ない……いいかげん、わたしもつきあうのには飽きた。そろそろ終いにしてしまおう？』

『……間に合わない！　ターラ、避けてっ！』

引きつったような蜜里の声――そして。
次の刹那、それはアーゼンターラ自身まで、届いた。
右肩の肉の一部が引きちぎられる強烈な痛みが。
『「きゃあああぁぁっ！」』
アーゼンターラの意識を引きずり出した――。

※

どん、と音をたててアーゼンターラは背中を何かに叩きつけられたのを感じた。
黒髪の青年から放たれるのは無数の闇の鉤爪だ。漆黒の空間で、どこからか飛来した複数のそれらが彼女の服を引っかけたまま壁に打ちつけられたのだ。
「く」
縫いつけられた！
「ターラ、動かないで！」
蜜里の鋭い声に従うと、左側の拘束が解けた――彼女が鉤爪を消してくれたのだろう。
渾身の力で身を捩ると、びり、と布が裂ける音とともに右手も自由になる。

が、それを待っていたかのように新たな鉤爪が飛来し彼女の頬を掠めていった。

頬に熱を感じる。だが、そんなことに構ってはいられない。

右肩の傷はほとんど塞がってはいるが、それでも流れ出た血が伝い落ちて紅蓮姫をしっかり握れない。

気を抜けば落としそうになるのを必死に堪えて、対峙する妖貴の姿を目で探した。

闇に紛れた漆黒の青年は、時折見せつけるかのようにその姿を露にする。いや、事実彼は見せつけているのだ——不甲斐ない破妖剣士を相手に、彼は完全に遊んでいる。

悔しい——悔しい。

しかし、暴れる紅蓮姫を抑えることもできず、機敏な動きを封じられたアーゼンターラに相手が脅威を覚えないのは当然のことだ。

わざわざ深手を負わせずに、しかも蜜里がその度に治癒の力を使うことさえ許して、青年はアーゼンターラを嬲り続けている。

悔しくてならない。

自分はこんなにも無力だったのだ！

青年の心臓の位置はわかっている。蜜里が教えてくれた。鳩尾、左大腿部、右足の甲、そして右目の四つだ。紅蓮姫はそれらを目がけて一直線に襲いかかろうとするばかり——避けられ

て当然だという意識も彼女にはないのだろう。
久しぶりのご馳走を前に、彼女は興奮しきっている。
この一年鍛えたはずの右腕は、すでに悲鳴を上げている。紅蓮姫の力は相当なもので、引きずられないようにするのがやっとだ。しかし早晩それもかなわなくなるだろう。
紅蓮姫――紅蓮姫！
どうして言うことを聞いてくれない？
やはり自分では駄目なのか――ラキスの力を借りてもすでにラキスではなくなった自分には従ってはくれないのか。
自分が情けなくて泣きたくなる。
駄目だ……全然力が足りない。紅蓮姫を得ても、自分は彼女を使いこなすことさえできない。そのための力が足りないのだ
目の前の妖貴は、弟を攫った芝牙尖には及ばぬ力の主でしかないというのに、不甲斐ない自分はそんな相手にいいように玩ばれている。
このまま嬲られるままに終わるのか。スラヴィエーラたちから委ねられた願いをかなえることもできぬまま――。
「ターラ！　前！」

蜜里の張り詰めた声が聞こえた——はっと息を呑んだとき、すでに目の前に妖貴の青年がいた。

「もう、戦意喪失かい？　やれやれがっかりさせてくれる……」

心底落胆したようにそう呟くと、青年の腕がアーゼンターラの喉に伸ばされた。

避けようとしたが間に合わない。

さして大きくはない青年の右手が彼女の喉に触れ、長く形の良い指がぎりぎりと締めつけてくる。

「く……っ！」

必死に抗うが、青年の指一本引きはがすことはできない。

イヤだ……。

何もできないまま……このまま死んでしまうなど、絶対に！

そう思う一方、だが自分に何ができると問いかけてくる声が聞こえる。

そう……こんなにも無力な自分に、いったい何ができるというのか。

紅蓮姫を使いこなすこともできない自分に……妖貴を倒すことなど到底不可能だ。

何を思い上がっていたのだろう。借り受けた破妖刀を前世の自分に委ねて、それで彼女の力を引き出していると勘違いして……本当の紅蓮姫を前に、自分は何もできやしないというのに

……お笑いだ。

自嘲の色がアーゼンターラの瞳に浮かぶのに気づいたのか、青年が哀れむように笑った。

「可哀相だね、君は。身の丈に合わない破妖刀と地位を与えられ、それに振り回されるしかないままここまで来てしまった」

哀れで見ていられないよ――。

青年の声は優しさを帯び、アーゼンターラは慰められているかのような錯覚に見舞われた。

優しく優しく青年は告げた。

「もう、いいだろう……？　もう、お終いにしてしまおう？」

言い聞かせるような声に、答える代わりに彼女は目を閉じた。

ごめん、ごめん、ごめんなさい……。

謝罪の言葉は誰に向けられたものであったのか――それは彼女自身にもわからなかった。

2

喉を絞める指の力が強くなる。
意識が朦朧となりかける——これで最後か。最後なのか。
アーゼンターラはけれど、もうそれ以上考えることはできなかった。
「さようなら、可愛い破妖剣士さん」
妖貴の青年の嘲りを孕んだ声も、もう鼓膜を震わせるだけの意味しか持たない。
あたしは結局……何にもなれなかった……。
アーゼンターラが最後の思惟を紡いだその瞬間——。
爆音が響き、漆黒の空間に激震が走った！
「なんだ!?」
青年の声がなぜか遠い。
その直後、アーゼンターラは背中に痛みを感じた。床に叩きつけられたのだ。

「ターラ！」

自分を呼ぶ蜜里の声が聞こえる。

その名を口にしようとしたがそれは叶わない。急に解放された喉は、何より空気を欲していたのだ。

げほげほと咳き込むアーゼンターラの背中を、蜜里の小さな手が撫でている。

だから——頭上から聞こえてきた冷ややかな声は、彼女のものではあり得なかった。

「無様だな」

吐き捨てるような声には、明らかにこちらを軽侮する響きがあった。

けれどそれは、あの青年のものでもない。なぜならその声は、やや低いもののはっきりと女性だとわかるものだったのだから！

「誰……」

首を絞められた際に浮かんだ生理的な涙のせいで、ぼんやりとしか見えない。

それでも、声のしたほうに顔を向ければ、黒髪の女性が佇んでいるのがわかった。

艶やかな黒髪を目にした瞬間、新たな妖貴が現れたのかと思ったが、すぐにそれが自分の勘違いであることに気づいた。

その女性の瞳は漆黒ではなかった。

右の瞳に輝く深紅――その稀有な色彩に、アーゼンターラは息が止まるかと思った。
目を凝らして見つめれば、その女性はどこまでも記憶にあるひとに酷似していた。
肩のあたりで切り揃えられた艶やかな黒髪――きつい印象を放つ整った顔立ち――すらりとした立ち姿。
何より特徴的な左右色が違う瞳――。
「ラエスリール……？」
あなた、目覚めて……？
言いかけて、またしても自分が間違ったことを悟る。
違う。
現れた女性はラエスリールではない。ラエスリールの深紅は左目だった。そして右目は琥珀だった……この女性の左目は極上の緑柱石を思わせる澄んだ緑だ。
けれど、似ている。似すぎている。
このひとは誰なのか――。
呆然として佇む女性を見つめ続けるアーゼンターラに、そのひとはちらりと一瞥を投じるともう一度呟いた。
「本当に、無様だ」

と――。

断罪者の声だとアーゼンターラは思った――。

※

視界の隅で、黒い影がゆらりと立ち上るのが見えた。

妖貴だ。

あれほどアーゼンターラが苦労して斬りつけても傷ひとつ負わせることのできなかった青年の右腕が途中で千切れているのに気づき、彼女は驚愕の眼差しで現れた女性を見つめた。

何という力の主なのか――彼女は見たところ寸鉄も帯びていないというのに、どうやって彼にあそこまでの痛手を負わせたというのだろう!?

「色彩を纏う稀有なる御方――」

女性に話しかける青年の声には紛れもない敬意と畏怖が宿っている。

では、彼女は人間ではなく魔性なのだろうか――確かに妖貴を容易く傷つける力など、人間に持ち得るものではない。しかし、彼女が魔性なら……酷似しているラエスリールはどうなのか。

頭が混乱してアーゼンターラは両者のやりとりを見守ることしかできない。
「見たところいずれかの王のお身内かと存じますが、そのような御方がなぜ浮城の破妖剣士を救われようとするのか、理由をお尋ねしてもよろしいか？」
態度こそ恭しいが、黒い双眸には明らかな敵意が煌めいている。
「ああ、そのことか。安心しろ、わたしは別にこの娘を守るためにここを訪れたわけではない。だからお前をこれ以上どうこうするつもりはない」
素っ気ない態度で女性はあっさりそう告げた。
「出会い頭にこのような傷を負わされた身としては、今ひとつ信用しかねるのですが？」
「お前に対して証を立てる必要があるのか？」
言外に、お前などどうでもいいのだと言いきる女性は、実に魔性らしい美をたたえていた。
「わたしはこの娘に伝言を頼まれただけだ。この無様な有様に、少々言いたいことは増えたが……そうだな、途中でお前に余計な茶々を入れられては困る、な」
ちらり、と青年に向ける瞳に浮かぶ光はどんな色であったのか――思わずといった様子で後ずさろうとした妖貴の全身が不可視の鎖に縛められたのは次の刹那だった。
「しばらく大人しくしていろ。話が済んだら解いてやる」
傲慢に言いきると、もう用はないとばかりに青年に背を向けた。

かつり、かつりと靴音を響かせながら、女性がアーゼンターラに近づいてくる。
その姿が不意に見えなくなったのは、蜜里がアーゼンターラを庇うように両者の間に体を割り込ませたからだ。
「蜜里！」
駄目、馬鹿なことをしないで！
必死に訴えたいのだが、声がまだよく出ない。
蜜里の服の袖を摑んで引っ張るが、彼女は振り向こうともしなかった。
「退きなさい」
女性の声が柔らかく変わる——蜜里に向けられるそれは、慈愛に満ちていた。
けれど蜜里は動かない。ぶるぶると震えながら、懸命に頭を振っているのが見えた。
「心配せずともいい、小さな眷属。わたしはその娘にも危害を加えるつもりはない。わたしはその娘に伝言を持ってきただけだ」
その言葉に蜜里の肩がぴくりと震えた。
「伝言……？　一体誰から？」
幼い声の問いかけに、優しい声が答えを返した。
「その娘の弟からだ」

心臓が――跳ねた。

「トーン!?　あなた、トーンが今どこにいるのか知っているの!?」

打撲も忘れ、思わず起き上がろうとしたアーゼンターラは、その瞬間全身に走った激痛に呻きを洩らす。

そんな彼女に女性は再び冷ややかな声をかけてくる。

「知っていたらどうだと？　その情けないさまで、弟の居場所を知ってどうするというんだ？　容易く命を投げだそうとした醜態を忘れて弟に会おうなどと思っているのか？」

酷い言葉だと思った――だが、反論できないとも思った。

彼女の言うことは正しい。必ず助け出すと自らにかけた誓いを簡単に破ろうとしたのは醜悪なまでに弱いこの心だ。

唇を噛みしめるアーゼンターラに、女性は吐き捨てるように「情けない」と告げた。

「あれから紅蓮姫を奪い取っておきながら、何という為体だ。許し難いまでの脆弱さだ」

あれというのが誰のことなのか、聞かずともわかった。

では、彼女はやはりラエスリールの縁者なのだろうか――そういえばラエスリールは半人半妖だと聞いた。ならばこの女性は生粋の魔性として生まれた彼女の姉妹なのだろうか。

「ち、違う……あたしは奪ってなんか……」

いない、と続けようとしたアーゼンターラの声は、鋭い女性の眼差しに喉の奥で消えてしまった。

「奪っていない？　ならば借り受けているだけだと言うつもりか？　借り物だから使いこなせなくても仕方ないと……？」

その言葉の前半は正しい――だが、後半は……酷い言いがかりだと思った。

「そんなこと！　あたしは……借りているからこそ、あのひとに恥じないように、紅蓮姫の名を貶めないように心がけて……！」

しかし、そんなアーゼンターラの言葉を相手は一蹴した。

「下らない。本当にそう思っているのなら、こんな醜態をさらすはずがない。一度や二度、思い通りにならないからと言って簡単に諦めるなど」

「あたしだって諦めたくなんかない！　だけど、どうしろと言うの？　紅蓮姫は全然あたしの言うことを聞いてくれないのに！」

みっともない真似をしている自覚はあった。

言い訳ばかりだ――けれど、言わずにはおられない。彼女の言葉を全部受け入れてしまったら、自分がとんでもなく卑怯で矮小な存在だと認めることになりそうで。

しかし女性の追及は容赦なく続いた。

「挙句に過去の自分に頼るなど、愚かしいにもほどがある。時は流れ、紅蓮姫はすでにお前の中の男が知るばかりの彼女ではないというのに」

意外な言葉にアーゼンターラは言葉を失った。

紅蓮姫が、ラキスの知る彼女ではない？　そんな馬鹿な――ラキスは彼女の初めての使い手で恋人で、ラキス以上に紅蓮姫を知る人間はラエスリールを除けばいるはずがないというのに、このひとは何を言っているのだろう!?

しかしそこで、アーゼンターラは思い出した。

紅蓮姫が妖貴殺しの剣と呼ばれるようになってから、十年も経っていないということを。

ならば、確かにラキスは今の紅蓮姫の全てを知っているわけではないということになる。少なくとも彼の恋人は妖貴を殺したことはなかったのだから。

いや、ラキスの知らないことばかりだ。

ラキスは紅蓮姫を置いて死んだ。

取り残された紅蓮姫は何をどう感じながら存在し続けてきたのか。ラキスの死を経験した一事を取っても、彼女が彼の知るままの彼女であるはずがないことぐらいわかって当たり前なのに、自分は気づきもしなかった……。

自分は間違っていたのだろうか――もしかしたら、今の自分のほうが紅蓮姫のことを知って

いるとは思えないが、ラキスの知らない紅蓮姫を知る自分こそが、現在の彼女を使うべきだったというのか。

だが、そうだとしても――。

「あたしには……だって、あたしはあのひとみたいに、破妖剣士になるために生まれて来たような人間じゃ……」

「馬鹿も休み休み言え！」

苛烈なまでの怒気が空間を震わせた。

向けられた怒りのあまりの激しさに、アーゼンターラは背筋が凍りそうになった。

「な、なにを……」

「生まれながらの破妖剣士だと？　そんなものがいるものか。あれは傷ついて足掻いて泥の中を這いずり回って、そうしてお前が知る姿になったのだ。指の骨を白焔の妖主の炎の糧とされながらも紅蓮姫を放さず、紫紺の妖主に全身の神経と繊維を支配され指を折られてもなお紅蓮姫を振るった……そうやって、あれはその破妖刀とつきあってきたのだ！　自分に都合の良い言葉であれの血を吐くような努力をなかったものにするなど許さない！」

その声の激しさよりも語られる凄絶な内容ゆえに、アーゼンターラは顔から血の気が引くのを感じた。

骨を妖主の炎に灼かれながら……？　神経と筋を支配され骨を折られても……？

それでも紅蓮姫を放さなかったというラエスリール――彼女がそんな傷だらけの姿で戦うだなんて想像もしたことがない。あのひとは鮮やかに敵を倒すのだと勝手に思っていた。

そういえば、と彼女は思い出した。

あれは紅蓮姫奪還の命を受け、ガンディア王宮を訪れていたときのこと、スラヴィエーラが口にしたラエスリールに関する言葉――。

『汚らわしい……とは言わないでちょうだい。彼女は決して不正な手段を用いて、「最強の破妖剣士」の名を勝ち取ったわけではないのだから』

あのときは、紅蓮姫の使い手があのひとだとは知らなかったから素直には頷けなかった。

けれど、今は……今なら。

連鎖的にスラヴィエーラから聞いた話が脳裏に甦る。

彼女が湯場で見たという、ラエスリールの全身に浮き上がった赤い痣――完治しても尚肉体が忘れられぬほどの衝撃とともに受けた傷跡の数々。

そうだ。

彼女が本当に自分が思うように軽やかに鮮やかに紅蓮姫を扱っていたのであれば、彼女がそこまでの傷を負うはずがないのだ。

目を覆うばかりの酷いものばかりだったとスラヴィエーラは言っていた。さもありなん——目の前の女性が告げたことが事実なら、どんな酷い傷を負おうと、彼女は紅蓮姫を手放さず、そうして戦うための足を止めることをしなかったに違いない。

では、彼女も悩んだのだろうか。

思うようにいかない現実に傷つき苦しみ、何度も諦めそうになりながら、血の滲む思いで紅蓮姫との絆を築き上げたのだろうか。

そうして生まれながらの破妖剣士にしか見えないような……そんな存在に自らを高めたというのか——。

だとしたら、先ほど自分が洩らしかけた言葉は！

あたしったら、なんてことを！　恥ずかしい……恥ずかしい！

ラエスリールを生まれながらの破妖剣士だと見なすことで、自分が及ばなくても仕方ないのだと言い訳に利用していた。なんと恥を知らない真似をしていたのか、自分は！

顔が真っ赤になるのがわかった。

恥ずかしく、いたたまれなくて顔が上げられない。目の前の女性の目を見るのが恐い——己の卑怯さに気づいた彼女にとって、女性の深紅と緑柱石の瞳は何より恐ろしいものに感じられたのだ。

しかし、その女性のアーゼンターラへの糾弾はまだ終わってはいなかった。
ぽつり、と……それまでの激しさが嘘のような静かな声で、彼女は呟いた。
「お前の弟は哀れだな。こんな無様で情けない……憎悪にも値せぬ相手をそれでも憎むより外ないとは」
静かな静かなその声は、それまでのどんな非難の言葉よりアーゼンターラの胸を深く抉った。
反射的に顔を上げたアーゼンターラは、女性の眼差しに揶揄も嘲りさえもないのを見て取りぎゅっと唇を噛みしめた。
女性は——本気で弟をリメラトーンを哀れんでいるのだ！
弟のことを思い出すたび、心臓は軋りを上げる。再会した時に向けられた憎悪に満ちた菫の双眸。あれほどの激情を向けられて、心は悲鳴を上げた。
だが、この女性は今の自分はそれを向けられる価値すらないと言うのだ。
憎悪を向けるに値せぬ相手に抱く感情とは何か。軽蔑か哀れみかそれとも嫌悪か——最後の感情はともかく、前のふたつは対等な人間に向けられるものではない。
トーンがあたしに蔑みか哀れみしか抱かなくなる……？
想像しただけでぞっとした。背筋が凍りつくようだ。

イヤだ、とアーゼンターラは思った。
それだけは我慢できない！
では、どうすればいい――彼に対等な人間として見てもらうためには？
そう、蔑まれるぐらいなら、憎まれるほうがよほどいい。許される日まで背負い、償い続ければ良いだけのことだ。
そのために、自分にできるのは――。
次に会うとき、真っ直ぐにリメラトーンの目を見つめることのできる自分になることだ。
立ち上がり、踏み出すのだ。今度こそ誰にも何にも逃げず、自分の意志で自分の力で。
躓いて倒れたっていい。泥まみれになったところで、立ち上がればまた歩き出せる。
生きている限り、何度だって立ち上がることはできる。どんなに遠い高みでも、死なない限り近づくことはできるのだ！
そう――ラエスリールのように。
今度こそ本当に、前を見据えて足を踏み出す。
アーゼンターラの覚悟が伝わったのか、黒髪の女性の眼差しがふわりと一瞬和らいだ。
「……ようやく、芯が通ったな」
艶やかな笑みを浮かべ、彼女は背後を振り返った。

そこには不可視の鎖に捕らわれた妖貴の青年の姿がある。

「見せてもらおうか、お前の覚悟を」

よろよろと、紅蓮姫を支えに立ち上がるアーゼンターラにかけられた声は、なぜか蜜里に向けるものとは違う優しさを孕んでいるような気がした。

「アーゼンターラ」

初めて、そのひとが彼女の名を口にした。

酷いことばかり言われたのに、名前を呼ばれた途端、胸が熱くなった。

「お前があの低俗な魔性を見事倒してみせたなら、その時わたしは我が名を明かし、お前の弟からの伝言を伝えるとここに誓おう」

その言葉が終えるのと妖貴の青年の束縛が解かれるのはほとんど同時のことだった。

「低俗とは……言ってくれる……！」

自由になった青年は、ぎらぎらと双眸を敵意に燃やしながらアーゼンターラではなく黒髪の女性を睨みつけた。

そのことをごく自然に受け入れながら、けれど——と彼女は思った。

倒すのは、自分だと。

がたがた、がたがたと右腕が不自然に震える。

自由を取り戻した妖貴の気配に貪欲な破妖刀が再び暴れだそうとしているのだ。
「紅蓮姫」
その名を呼んでも、破妖刀の震えは収まらない。
けれど、それには構わずにアーゼンターラは立ち上がった。
失血の名残か少し眩暈がしたけれど、大丈夫だと彼女は思った。紅蓮姫を握る指に力をこめる——確固たる意志をこめて。
「どこを見ているの？」
青年に挑発的な声をかければ、紅蓮姫の動きはさらに激しさを増した。
この力を抑えこもうとしか、以前は思えなかった。そして叶わぬ現実に打ちのめされた——けれどきっと、それは自分だけに限られたことではない。
ならば——抑えるのではなく、従えるのでもなく。
ただひとつの目的のために。
「紅蓮姫！」
強い、強い意志をこめ、アーゼンターラは破妖刀を一喝した！
「馬鹿みたいに心臓だけを狙うのはやめなさい！　そんなことで命を差し出してくれる魔性なんているものですか、少しは頭を使いなさい！　もしもお腹が空きすぎて、そういうことも考

えられないというのなら……」

挑む目をして、彼女は誘った。

「あたしの言うことを聞きなさい。そうしたら、あたしがあなたに極上の餌をご馳走してあげる」

3

マテルマは浮城と縁深い街としてその名を知られている。

白砂原にほど近いこの街には、浮城の捕縛師の多くが必要とする封魔具を作る職人が多く集まり工房を構えているのがその理由だ。

捕縛師の中には自作の封魔具で捕縛をこなす者もいるが、それでは多くの仕事をこなすことは難しい。

そのため、よほどに特殊な造りのもの以外は、マテルマの工房に作成を依頼するのが浮城の捕縛師たちの倣いになっている。

無論、外部に頼む理由はそれだけではない。捕縛師の全員が自分の封魔具を手製で作り上げられるほど器用とは限らないというのが一番大きなものと言える。

そんなマテルマの老舗の封魔具専用工房から、ひとりの女性が出てきたのは日が西に傾きかけた午後のことだった。

長い黒髪をひとつに束ねたその女性は、はっとするほど美しい容貌の主だった。

烏羽玉の髪、象牙の肌――きつめながら柔らかみも併せ持つ清冽な顔立ち。何より目を引くのはその極上の緑柱石を思わせる双眸だ。

しかし不思議なことに、彼女が通りを歩いてもすれ違う誰も振り返ろうとはしない。まるで彼女がそこにいることに気づけないかのように。

事実、彼女は空気そのもののような気配を纏って歩いていた。空気が通り過ぎても誰も気にはしない。ふと気づいても風が吹いたように感じるだけだ。

誰も彼女の稀有な美貌に気づくことはない。

そんな風に、誰にも見とがめられることなく街を歩く女性に、声をかける者が現れたのは彼女が工房を出て四半刻ほどが経ったころのことだ。

『リーク』

聞こえていないわけでもないだろうに、女性は歩みを止めようとしない。

『リーク』

それでも彼女は答えない。

「リーク！」

実際に空気を振るわす呼びかけに、彼女は一瞬だけ立ち止まったが声の主が見あたらないと

気づくと再び歩き出した。
「リーク！　いい加減にしてください！」
「聞こえないふりとは、意地の悪いことを」
ふたつの青年の声が揃って背後で聞こえて初めて、彼女はようやく足を止めた。
振り返り、そこに黒髪の人間の青年の姿を認めてにっこり笑った。
「ふたりともさすがね。こんな人混みの中なのに、突然現れたことに誰も気づいてないわ」
褒められているというのに、ふたりの青年の表情は微妙だ。隠形したままでは返事をしようともしなかった女性に含むところがあるのかもしれない。
しかし美貌の女性はそんなことには気づかぬ風で、「ところで何の用かしら？」などと訊いてきた。
途端に青年のうちの若いほうが顔を顰めた。
「何の用、ではないでしょう。いったい何を仕入れてらしたんです？」
この言葉に、女性は演技とは思えない素直な仕種で首を傾げた。
「何を、って――」
答えるより先に懐から取り出された品に、人間に擬態した魔性ふたりは眉間に皺を寄せた。
彼女が取り出したのは、複数の鈴を連ねた一対の耳飾りと手纏である。

但し、ただの耳飾りでも手纏でもない。

「……それは、封魔鈴ですね。リーク、貴女には必要のないものだと思うのですが、なぜそれを求められたのか、お尋ねしてもよろしいか？」

今度問いかけて来たのは年長の青年だった。

「まあ、わたしは捕縛術は使えないから、確かにこれは無用の長物なのだけれど」

年若いほうの青年が、苛立ちも露に問いを重ねる。

「そんなことはわかってる！　捕縛師じゃないあなたが、なんで封魔鈴なんて求めたのか、それがわからないから訊いてるんじゃないか！」

その答えはあっさりと返された。

「ええ。でも、あの子には必要だから」

青年ふたりの顔色がさっと変わった。

あの子には必要――これだけで彼らには充分だったのだ。

「なにを言い出すんだ！」

信じられないと、年若の青年が癇癪を起こす傍ら、

「本気ですか？」

年長の青年は、ひたと彼女の目を見つめて問いかけた。

「ええ、本気よ」
相手の目を逸らすことなく見つめ返しながら、緑柱石の双眸を持つ稀有なる美女ははっきりと答えた。
「……我が君はそんなことは望んでおられません」
苦しげな声で訴える青年に、美女は無情にも「そうでしょうね」と答えて続けた。
「けれど、そこがあなたたちとわたしたちの違いね。あの人はあの子を死なさないための最善の策を選んだ。けれど、わたしたち人間にとって、死なないことと生きることは同じではないの。欲深いとあなたたちは思うかもしれないけれど、短すぎる有限の命しか持たないわたしたちは、死なないだけでは満足できないのよ」
「ですが、あの方……姫君は――」
「何に生まれついたかではなく、どう生きたいかの問題よ。あの子もわたしも心の有り様は人間でしかない。そうである以上、あの子は死なないことではなく生きることを望む……そしてわたしはそれを助けると決めたの。だから……ごめんなさいね？」
ふわりと微笑む女性の双眸が不可視の力で輝きを増す。
瞳に宿る絶大なる魅了の力――。
その力でふたりの魔性を縛りつけた上で、黒髪緑瞳の美女は宣言した。

「あの子のための封魔鈴を持って、わたしはあの子を迎えに行くわ」

邪魔をするのは何者であれ許さない――。

最強の魅了眼に匹敵する魅縛（みばく）の力が、この時世界に揮（ふる）われた。


破妖の剣 ザ・ダイジェスト
妖主たちは苦悩する
小島榊
原作／前田珠子
『言ノ葉は呪縛する』に登場した来狛と煙弥――
彼らは白狛の妖主・白煉の配下である
魔性の中でも最強の力を誇る世界に五人しかいないという妖主の一人
白煉さんはとても強くて美しくて
おっかない。
さてそんな白煉さんは実は子持ちだったりする
白煉たん LOVE♥
趣味：おんがくかんしょう
その昔これまた強くて美しい紫紺の妖主・藍緒さんにまんまと騙され
人の姿に化けて人間界で暮らすこと十数年
騙されたことに気づいた白煉さんは大激怒！
二度と幸の前に姿を現すでないぞ……!!
ゴゴゴゴゴ
ミヤ
ネコ
住んでいた街も焼き消してしまったそうな
ニコス ねーちゃん♥
こりゃ ねーちゃん
一方何も知らぬままたったひとりとり残され
助けを求める道中ラエスリールに拾われた息子のザハト君
同一人(?)物
彼もまた強くて美しい「邪羅」という名の魔性だったのである


魔性の生活に戻って
暇を持てあましていた
白煉さんと藍絲さんは
ほう
感心よ
ほさせておったか
あの娘と
戦わせてみるのも
面白そうじゃの
ふむ
我が命のままに動く
あの娘の人形を
作ってかるか
たわむれに
悪事の数々を
仕掛けて
みるのだった
YOU WIN!
二人ともラスにやっつけられたけどね……！
ま
老後の世話くらいは
してやるから
それまで息災でな！
こら
邪魔!!
とかが
実の
親に対する
言い草か
なーに
言ってんだか
肉親の情なんて
もとより
ないくせに
ごっ
※魔性とはそういうものらしい
息子に痛いところを
突かれた二人は
おとなしく引き下がった
のでありました
ちゃん
ちゃん
何が
めでたし
めでたし☆だあ？
ラスに
なれなれしく
くっついてんじゃ
ねーぜ
このクソガキが
妖主
その3
めでたし
めでたし☆
終
ここら
辺まっ

あとがき

この本が発売される頃、世間は夏真っ盛りかと思いますが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。

お待たせしました！　破妖の剣『鬱金の暁闇』第四巻をお届けします。

舞台は『鬱金』第三巻終了時から一年後、記憶を取り戻したアーゼンターラを中心に物語は展開いたします。ヒロインはどうした!?　と突っ込まれそうですが、そこは本文を読んでのお楽しみということで（怒号が飛んで来そう……）。

謎に包まれていた『第六の雛の君』が、ようやく本格始動します。その煽りで気高く美しくおっかない御方がとんだ目に遭わされております。雛の君（仮称）が狙うのは何なのか、他の妖主たちはそれをどう受け止めているのか、これからおいおい明らかになって行きます。

さて、今回本命ヒロインがとんでもない状況に陥っているということで、『鬱金』のダブル

ヒロインの片割れアーゼンターラに頑張ってもらったわけですが……破妖のヒロインの宿命なのでしょうか、後半彼女も相当痛い目に遭わされることに（苦笑）。打たれ弱くては破妖世界では生きていけません。彼女にはがんがん鍛えられて強くなってもらう予定です。

さて、広げに広げた大風呂敷を畳むに当たり、過去自分の記憶力を過信して痛い目にあった経験を繰り返さないよう、今回『鬱金』のこれまでの流れや裏設定を含めてプロットを全部書き直すことにしたのですが、書いても書いても終わらなくて参りました。

わたしはパソコンの扱いが未だ未熟でデータをどこにしまい込んだかわからなくなることがあるもので、その危険を回避するために手書きで始めたのですが……B5ルーズリーフ五十枚を突破して尚、まだ細かい展開など書ききれておりません。最終巻を書き始めるまでに、いったいこのプロットはどこまで膨らむのか、それまでわたしの右手は無事にすむのか、ちょっと恐ろしい状況です。

しかし、今回の原稿を読み直して気づいたのですが、綺麗で強くておっかない女性陣の人口密度が異様に高いです。大半は魔性なのですが、ひとり生身の人間なのに、他の面々に引けを取らないおっかなさを発揮するひとが……（笑）。もしかしたら『鬱金』四巻で一番恐ろしいのはこのひとかもしれません。

五巻では、今回台詞しか出てこなかったあのひととか、ちらっとしか出てこなかったひとた

ちとか名前すら出てこなかったあのひととかあの方とか……まあ、頑張って働いてもらうつもりです。

今回もイラストの小島榊（こじまさかき）さんを始め、関係各所の方々には大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

さて、これからの予定ですが、次も『鬱金』です。

長くはお待たせしません。

それでは、またお会いできることを願って――。

平成二十一年　夏

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
鬱金の暁闇4

COBALT-SERIES

2009年8月10日　第1刷発行
2009年8月23日　第2刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2009　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601317-8 C0193

めくるめく超（スーパー）ファンタジーの伝説が今、再び…！

コバルト文庫 好評発売中

破妖の剣

前田珠子

イラスト／廈門　潤

漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え！


破妖の剣 外伝
伝説級ファンタジー、外伝で登場!!
言ノ葉は呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトが呪いを解くために自分を養っている事を知ってしまい…?
前田珠子
イラスト／小島 榊
コバルト文庫
好評発売中


コバルト文庫
好評発売中
本好き少女の
波瀾万丈ファンタジー！
前田珠子
イラスト／明咲トウル
天を支える者
天を支える者1～4
天を支える者 古戻唄1～5
天を支える者 罠は、蜜の味
天を支える者 緑風に誘われ
天を支える者 緑の糸をたどって
天を支える者 緑蘿の檻に囚われ
天を支える者 緑玉の枷に繋がれ
天を支える者 緑の鈴を、振る
天を支える者 空に響く緑の鈴音

〈好評発売中〉 コバルト文庫

二度はないと誓った、この愛が痛い。

前田珠子 〈空の呪縛〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

空の呪縛

『針の森』に住む美しい女柱神フィオルシェーナは、恋の誘いを頑なに断り続けていた。それは、過去の過ちを繰り返さないため…。恋獄の楔に絡めとられた女神の愛の物語！

柱神フィオルシェーナの前に、かつての恋人の生まれ変わり、ファナルシーズが現れた。運命が、二人をあざ笑う。



空の呪縛

月の堕ちるとき

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子

〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱

聖石の使徒
狩人の爪





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魍暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魍暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魍暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

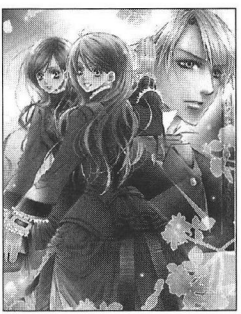
〈好評発売中〉 コバルト文庫

2人の愛は、永遠に不滅!?

伯爵と妖精

月なき夜は鏡の国でつかまえて

谷　瑞恵
イラスト／高星麻子



ある日「妖精国（イヴラゼル）」の秘密が隠された石を手に入れたリディアはその秘密を追う。一方、エドガーは怪しげなオークションに興味津々で!?

伯爵と妖精シリーズ・好評既刊

あいつは優雅な大悪党
あまい罠には気をつけて
プロポーズはお手やわらかに
恋人は幽霊（ゆうれい）
呪いのダイヤに愛をこめて
取り換えられたプリンセス
涙の秘密をおしえて
駆け落ちは月夜を待って
女神に捧ぐ鎮魂歌（レクイエム）
ロンドン橋に星は灯る
花嫁修業は薔薇迷宮で
紳士の射止めかた教えます
紅（くれない）の騎士に願うならば
誰がために聖地は夢みる
運命の赤い糸を信じますか?
誓いのキスを夜明けまでに
紳士淑女のための愛好者読本
すてきな結婚式のための魔法
魔都に誘われた新婚旅行

〈好評発売中〉 コバルト文庫

巷で噂の「燃える水」とは!?

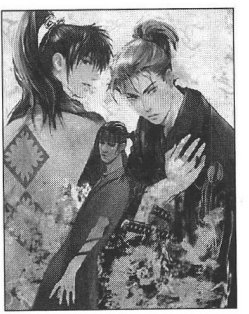
炎の蜃気楼邂逅編

真皓き残響

奇命羅変

桑原水菜

イラスト／ほたか乱



柏崎で話題の「燃える水」が怪異のしわざと疑う景虎。その正体を突き止めるべく里に侵入するが囚われ、仲間に入れと迫られて!?

〈炎の蜃気楼邂逅編〉シリーズ・好評既刊

炎の蜃気楼邂逅編 **真皓き残響** 夜叉誕生(上)(下)

炎の蜃気楼邂逅編2 **真皓き残響** 妖刀乱舞(上)(下)

炎の蜃気楼邂逅編3 **真皓き残響** 外道丸様(上)(下)

炎の蜃気楼邂逅編4 **真皓き残響** 十三神将

炎の蜃気楼邂逅編 **真皓き残響** 琵琶島姫

炎の蜃気楼邂逅編 **真皓き残響** 氷雪問答

〈好評発売中〉 コバルト文庫

恋人たちを引き裂く闇のドレス――！

ヴィクトリアン・ローズ・テーラー

恋のドレスと追憶の糸

青木祐子
イラスト／あき



クリスの前に現れたユベールの提案とは!?　一方、弁護士ケネスも闇のドレスとクリスの過去に近づき!?　大人気シリーズ急展開!!

――〈ヴィクトリアン・ローズ・テーラー〉シリーズ・好評既刊――

恋のドレスとつぼみの淑女
恋のドレスは開幕のベルを鳴らして
恋のドレスと薔薇のデビュタント
カントリー・ハウスは恋のドレスで
恋のドレスは明日への切符
恋のドレスと硝子のドールハウス
恋のドレスと運命の輪
あなたに眠る花の香
恋のドレスと大いなる賭け
恋のドレスと秘密の鏡
恋のドレスと黄昏に見る夢
窓の向こうは夏の色
恋のドレスと約束の手紙
恋のドレスと舞踏会の宵
恋のドレスと宵の明け星
聖者は薔薇にささやいて

〈好評発売中〉 コバルト文庫

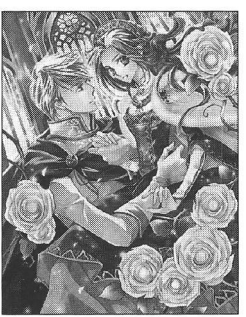
あなたと、この国を守ってみせる!!

そして花嫁は恋を知る

緑の森を統べる姫

小田菜摘

イラスト／椎名咲月



イシュトファルと婚約し、異国の君主となったエリスセレナに、領主のひとりが求婚した。不審に思う中、隣国が進軍したとの報せが…!

〈そして花嫁は恋を知る〉シリーズ・好評既刊

そして花嫁は恋を知る 黄金の都の癒し姫

そして花嫁は恋を知る 白銀の都へ旅立つ姫

そして花嫁は恋を知る 紅の沙漠をわたる姫

そして花嫁は恋を知る 緑の森を拓く姫

〈好評発売中〉 コバルト文庫

法皇暗殺事件の犯人は使者団!?

グランドマスター!

聖都をめざせ

樹川さとみ
イラスト／松本テマリ



〈黎明の使者団〉との会見直前に、法皇が何者かに襲われた。一命は取り留めたものの、使者団が容疑者として疑われてしまい…!?

〈グランドマスター！〉シリーズ・好評既刊

総長はお嬢さま
呪われた女騎士？
道連れは王子さま
のこされた神の郷
姫総長は失業中!?
あらたなる旅立ち？

〈好評発売中〉 コバルト文庫

契約の指輪と失くした恋を探しに…。

月花の守人

緑の魔王に愛された娘

山本　瑤
イラスト／もぎたて林檎



異世界を渡り失せ物探しを生業とするフユウの少女ルカ。森林世界の女王の依頼で、婚約者が奪った〝契約の指輪〟を探すことになり!?

〈月花の守人〉シリーズ・好評既刊

月花の守人 忘却のルカと月神の花嫁

メイちゃんの執事

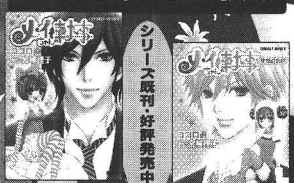
香港炎上!?　大脱出!!

ココロ直
原作／
宮城理子

お嬢様、
今回は香港へ参りましょう。

ノベライズ第3弾が登場！

社会科見学で香港を訪れたメイたち。豪華なホテルや初体験のカジノを堪能するが、マフィアの手が迫り!?オリジナル要素満載の第3弾!!



コバルト文庫

コバルト文庫　雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作　正賞の楯と副賞100万円（税込）

佳作入選作　正賞の楯と副賞50万円（税込）

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚～105枚。
【しめきり】毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌「Cobalt」1月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社　コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**（読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚～350枚。
【しめきり】毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌「Cobalt」9月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社　コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt（2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売）をごらんください。

ISBN978-4-08-601317-8

C0193 ¥438E

9784086013178

定価 本体438円＋税

1920193004380



コバルト文庫

ラエスリールの昏倒より一年後。伝説の破妖刀・紅蓮姫は、新しい使い手であるアーゼンターラの手の中で、魔性の命をすすっていた。しかし紅蓮姫の暴走を止める真の使い手は、結界の最奥で深い眠りについたままで…!? 新たに生まれた六人目の妖主・雛の君の狙いは何なのか？　ラスの父である金の妖主の真意とは…？　大人気ファンタジーの本編が遂に再始動。数々の謎が明かされ始める…!!